曽流曽我高名松
全
一
全

1654

當流曾我高名松一之巻

目録

一 子弱乃行竿に洗衣紙墨月夜

一 冨士ハ日本の蓮葉山

附り 四巻ハ如孫ハ對面

大磯ハ穏倉乃不夜城

穏の手に揚屋町

二

主の力小霊神菓樹しゝ初ちの名深

附り

敕討の大槌おて死る碁盤忠信を手本

寝ぬ此暖利は胃の酒毒によく武士のかゞミ

三

吉例二代の嫁へ足に乾咲や難波津

附り

女郎の上羽の蝶もくわらゆりの袖

村子鳥のさんざ山案仕涙しゝ仮の兄弟

第一

子鳥の竹竿に洗衣の星月夜

附り大磯は鶏舎の不敕城猛の手に揚屋町

馬が代の八子代とぞ鳴塩の山。指出の磯の子鳥は露の隣の

鈴ひありて子鳥の見どり竹の下ゐはぐにもとゐなる此時

津帝をよぞふ使り。八重山といへるは昔の海ゐにて第根の山に

あらはれり。富士を成実のうゝにみる。非の隣て曽我の里なり。

兄弟の仮信がいふしへの領地にて。渠が後敵は実に領ぬ柿の

後敵といへるは。去肥の太郎実氏が女にて伊豆九ろが子息河津

三郎が妻女たりしが。河津は従弟の工夫を厨の厨仮経に討ち此

むねんを晴さんが為。一万第王といへる忌れがこの男子をつれ

て。曽我の仮信へ改嫁してがり。御に武士の妻女ゑらび夫

我物まじき事なれども。男は勇ましき世乃そしりを遁
て。我をおもふ女乃手本たるべし。其後男我も病死して又後
家と成。一万箱王成人して。十郎成家の郎附家と名のりなる
が。尚玉は大磯小磯化粧坂とて傾城の長けりて。かまくら武士の
もてあそび。三絃乃撥音御浦出陽と此里くより飛び出
して。今は堅き人の心我やうげ。酒壺は紋乃付しを虎が
物がたりじめし。せでは十郎は虎出あ。五郎はかねは男を
ふかへして。恋は勇を忘れしを幾度か老母の美見によつて
我の君は立ゆる事。あさがほき親乃悲なるめ。せでは心ひ立
ひさび粉物卿狩独成家は給せ付られ。紀後出河藤の御
狩をうつされ。富士乃牧をぞ狩り給ふ。日本国乃諸武士ら弓

矢たばさむ。ほどの業は此狩はいかでもづ進じとそのく集集
しける中に。男我兄弟を母人は訴訟しなる事内存は親を敵
成経を狩場にてうかがひより。討て本望とげんなり。母人
はかゝる事とも夏にもしらず。弟き者は兄がの事は見をき
て。後乃語句は殺されよとこしらへたてて出し給ふ。兄弟は
今こそ別進の出すがたよく見なりて。未来を乃かたみぞとん
乃なるべきをしらへし。男我の里をぞ出ふなるがせでは此日
は及べども兄弟が便りあらされば。老母はあんじまづらいせ
かひ。ことさらに此服病をもちに悩つよく。座愛をだまを
杖つかせ給ふ。夏は二乃文とて兄弟がなるは姉にて。いまぞ
母人乃手にをはせしが。女の子とて掛事はんつきこゝろ考り。

中く自作の及ぶ事にあらず。志ろふ世の風雪に兄弟我
兄弟出狩の場にて。敵をそ尾よく討たりと。母人さこし
めされて。扨ハ[illegible]来れ有るをとげたるよか。我に時こそあき
今日本国の武士の中にて。親の敵我討たりハ武士の冥
かに叶ひたり。たゆくを切りて母になどよ給こだせぬぞと。
いよく兄弟を待たねあふ。老のんのせいろしく上疝病
氣のさわりとなり。我に育たる出目より出るハ涙の志づく
なり。打ふし虎が狩鬼王国三郎を免しつまて。兄弟我
にさたりまづひそうに二の文にたいめんして狩場の兄弟を
たりそれだ。二の文を出すが兄弟が好かれだ。涙をかくして
人々にさやす。中くありていをゆかばいとゞ忘しふなり

先ず兄弟の出事ふかく歎かせ給ひ。出命にさたらんを
かなしけれだ。一日我ともかくさまんなどハ何とぞ志めじを命を
べしと。志めし合せて人々をまづかたるに志のだせをさ。此度
国ないしたる時家とかねが中の一子金藤だかりを二
の文つまて母人のまへに出。先ハけまい坂の小ねと時家度
なれさせ給ひ。かうけ給ひし此子金藤度とゆへ此度
祖母食の出つまぐをなぐさめんなるにおけけし里の
乳の親。国ないめされしとゆされたれだ。母人ハ孫の手をえ
ゐ郎が子にて。さくるよか。我ハ祖母なるぞ今より
変にあて。老のんなぐさめよ。我に世に血もちぢ程
大切なるものハなし。日本国に我人か幼きものハ有

それど。此男乃孫といふは兄ひとりなり。ゑし此時家
我出家させんとしひ。若根の山へのがらせるよ。山我
少げて男になり。まうへかねよかじ。ミし事以外如
不孝とて。ミとせ勧進せし我。仮如二乃文家来此鬼
主圖三ら。さ如くん我つくして俺せしゆへ勧進をゆる
しける。ミげからいまだんつよく勧進をゆるさずだ。かね
を身をすぐかり。此孫に今たいめんはさせまじ事に。
伴至檜現乃此ひかへにてたやく時家をゆるしかる
ゆへ。孫にも今あふ嬉しかしさぞおりまし此月我しがらく
あけて。孫乃魚の見まかしやと。令蔵をなでまいし
さざめて時家に似つらんものを。見へぬはあふかるかいを

かしと。蔵渡秋にあまりかる。二の文も志やくりあげ
清じかしさ乃二郎我。見ぐすぞかりに浪結ふ。令蔵は
清くぐと老母のかが我ながめ。何とて此祖母さ夜はお目
をふさいでおいするぞ。餘所乃はどれを目をあいておは
もるとふしぎがる。初ん死中詞はなくよ忘乃。三條此松
風たぐふらん。二乃文は母人のおんが我なぐさめんなに。時
家が子の令蔵をおまへく出しかるよ。かへいてお歌手の
たまとなり。此まづらいよかまかん事世にをかなしく。夜ぐ
世男乃はやりだかしよ。夜ぎつかし。一まげおくへ母人を
いざなへ。蔵乃小鳥の羽風を此月に沙て。石菖蒲に水
うちてん乃たとけとつくしかれど。母人はなまじ我に時家

が子よりおひ給ひて。いよ〳〵の事なりしや。奴如いかふと
あんじ給ふ。親乃んぞあやれなり

第二

主乃力ふ霊神第摺引ハ初より此名深
附り寝光乃陰利ハ霄此酒嘉よりの武士れぐみ

志りるよ鬼王國三郎ハ奴如時宗のうち見りちて帰り
かれた。二乃文此給せよハ母人ふりく歎かせ給ふ事。世よ氣
毒よ侍れど。志ばらく鬼王國三郎主の奴如時宗と
いのかり。無事よ古郷へ帰しとて。此ぬ乃見へぬを幸よ。
母人乃おんぞなぐさめ申せとさてや申給ひしゆへ。義
乃長尾よて虎かねぞあいて。十郎の郎此楚古
とこそハ志りまり。ゑしは位尉義經よしの大前よ

をそかれ給ふ事時よ。佐藤次信我こそ九郎判官と
名のり。大前よむかひてあざむき。主君よしつゝを奥
州へ落しかる。是我今の鬼王國三郎。母うへのお歎きを
なぐさめんがゐよ主の志似とる忠義の程。我こそかれ
つぎのぶよんきいかぞをとるまじ。ぞとよりも鬼王國三郎
ハ奴如時宗よ初き時より付志るがへ同じやうよ如人世
ふりなれど。拘いひ奉附よく覚へ似るよハあらでこまく
ぞや。雖よ兄乃鬼王ハ十郎乃家来よて。所業もよく似て
桑和之。弟國三郎ハ四郎が下人。志りも勇ぶり恰合慈
氣こんき恩つゝへなく。揚すこなき風俗なり。さらばいよく
母うへ乃それぞとしろしめすやうよ。楚古ながらよ思ひ出る

今ハむりしに如むし。大磯まで一とせ和田の一門九十三騎
和日三日乃大酒なり。其時よりり酒奥のうへ虎を殺
愛へ出せよと。使りさなりさらばぜんめいよくかがら出られし
を主人十郎兄弟いぢり。口話をも口拍子よく申されし
弟兄て鬼王整古せり。又国三郎ハ三郎弟の五郎兄弟
実て兄弟如に和尊とらせてハ安からずと。蒿馬に打のつて
大磯へかけつけて板橋にもいくとたちて其が座愛を窺ふ
に。義盛あやしや陳子にもうる人氣ハたまなるぞや。義盛
が此座愛をのぞくハ曲をのおもさらへ来れの信せを請子見
乃鈴夷京陳子を明て見てあまだ。曽我の五郎時宗なり。
鈴夷京渠ハ坂東にて力自慢の男と実いでやよしひで

ひ見んと時宗がくさぐりに立つきくるしからず此自分にも座
愛へ出て一献来れと引たりけり。時宗もそこ乃ものやさんん
ぢる友足ハ松の古祢の蔵ざちて乗に力をくらべける。其神
たらくを国三郎徳見兄へてまなびけり。坂ハ手ハ虎なり
がねにて始終の整古仕上つ。今こそ誠の十郎五郎。
狩場より敵を討て帰りしと母人へ申あげ万事二乃
更乃さしげにて。弟如時宗が素袍袴をゆるされて。
鬼王兄弟見にして奥へ通りける。母人乃此悦び嬉し
なるぞよ志ぢらく此こともなりしが。さぐりよりて母人が
手紙さらへ。兄ハ弟如兄ハ時宗出来されたりく此悦びをさ
んと乃老乃命もをしかりしが。めをや兄弟が年来此本

をとげて立ゆり。對面乃うへさりさてハ此世に名称ハ
なきさ身なりさりながら時宗が子乃令義が。烏帽子素
袍の元服をとがる。又字をこの命をと祈らバ子ゆへの闇か
らん。扨ゆつ〇ハ當時乃大身家敵此司それを兄弟
討れし手柄のなど。主義のなき様は母に語りきこう
せとのぜませ給ふ。母人詞紙そろへ給せのごとく成つ〇ハ
大身といひ。辞文まれくがねらふ事ハ物のうへなまれ用
心きびしく万事に油断仕らざされた兄弟傾城ぐる
ひに初義を見ざし。恐を難ハん武士のいきどなりを忘
たると。隠し国付のもの毎度中につき。扨ハ思ひ
通しの用心。終りに寝屋子万なりとそろく油断

仕る。只身内に身をやつし。ぢまぐの商人にさまを
かへ。工藤が屋かたへ出入してかり屋の案内つまりぐを
さいくとかんをさ。敵討乃用意仕るいとぐさへ。当我只身は
貪しきとさたされだ。自然は飢につかれ死なんよりは。仮
縄をうつて世に誉れをのこさんと。切腹の結使なんぞ
さみしきまんを口ぬしく。我くが肌に金子五数づゝ縫入。
一札に對憤の次第を書附。此兄弟におづからんと強
に張付ゆゑり。扨も仮つまは鴨屋相がうを門戸きびしく。
敵思り寝ずの表人拍子木を敷焦りなし。我くは
又支度乃鉄矢大槌にて。鴨屋の門を抑き破り。表人
一人案内乃為にからめさいて。おるやいだらは臣府に

首我討落し。奥をさして切入だ。迎かくるものだらにて。
刃むかいふせぐものはさうになし。されば実に十七八だらの
まへ髪。くはしくきけば元は穏倉乃本郷屋の悴なしが。
きりあうすぐれしゆへ仮つまゆしかへてふかく情をかけ。其
うへ工藤が家老近江小藤太が嘉子にして仮縄が至忍を
つとめけるが。此者主の恩にはは命我もつるより和なしとさし
りにきくむ我くに的對。志かをもあしく働しをおまり
に取存ふびんに存じ。請ながしては切たらい。何とぞ迎し
たきけんとしかれども。中く一足もあとへは引ぜ。かて
あましてふびんながらを切ふせて作りぬ。其和は家来を
いまだいをの一人もこれなく。ぢふまくに仮縄が寝るに

へて見ませば。敵は変に居ず。扨は討ちしたる口をしや。
此うへは面くらしちがへて後を切んといひける時。十郎
まてこと仏經が取ふさんに。手をかけて見るかたく
かなり。扨こそ迎出て見れなきゆへ寝肌のふとん
さめやらず。遠くはゆかじ。にがせよと。それより手ぐに見あ
ぐりしに。苅業つんざる鴨家の和面に。人新見ゆるは
あやしやと。切殺したるやりだらが。刀掛指紙なげこそ
なれば。援身の孫に出て仏つゆ迎出るを。踏倒しては
はへた。大事の親の敵なれば引起して左右方より。
後来の鬱憤をいひ出せ。一乃太刀は十郎。二の太刀は
五郎仕りて首をうつて。もかいちまた仏つゆが若し

たる。白綾乃小袖の片袖切て首をつゝみ。ふしげかに
河津が悴曽我十郎仏如。同じく五郎時むゆ。親の敵
を只今対て遁るなりと。名のりて此鴨乃此所ちかなれば。
史乃月ふ迄能く念のへて。仏つゆが敵を再出給りしと。
語りなるこそんちよし

第三

吉例二代の嫁入足に花咲や雛波津

附り村子鳥のうんざ心素仕流しさ後の兄弟

母人は此物語を安給ひ。踊あがりてよろこび給ひ。此桟嫗
乃うへ虎かね紙もぐしうよし。宮お二の文中されしが
何とて笠へは御給はねと。此弱きがたし。疾よりおめ見へさせ
たくなしはへども。此桟嫗の袖いかごとさしひかへ再びり

ぬおゆるしのうへハとて。虎かねおそぞぢかく来りしよし。
二乃文元つぎのかへだ。母人ハ母人をたりみぎまをきゝ給ひ。
弥ハ世ハなるさ見事にハ弥つくし給ひる事。かへもぐ也
うきしられ。武士の妻ハ京男ハへど。只弥ありて義をひき
まへ。夫乃落墜を捨ざるをこのむと傾城桂女ハ稱ハかし。
勤めしまへだもとの身ぞや。向後ハうハが嫁之姑之。心をきかう
行事也。ひとへかけて見事をたのむなりと稱くまぐらさ出
詞。虎かねも落涙ハ神代海とぞ知しまける。母人中よりハ
我くハもたや勤めの妻を仕也。身まくにぬてゆへだ。なく
こやぞへ仕りんのたけの出者ひとつくしやさん。おそれかぐら
我くをもこれ不役下さるべしと。ぞとやうなるひいさつ。稱も母人

よろこびなひ。大勢乃人中ハもかまれしゆへハ家もこなまき。
詞のたしもいやしうず。見ぞのうきしさハ河津殿ハおきてか
乃妻忘れ。いさ恨びの酒寄せんと。給せにしたるが。地子かつけ給
いづきだ。母人元あげ給ひ十郎ハ下されて。それより以来くハ
盛まつり。をさへつあいの又あいのと。母人ぞろようさたち給へ
だ。二代文めくだせしたるまいいひ合せたるごとくをのく奥をかしか
しかる。弥ハ夏乃世中ハ又夏だかり。此妻忘れ。見者とやいかん。
とやいかん。ゆの人あらだ感づべし。酒寄の宮中へ箱根乃別当出
出のよし案内を。母人見へたやくお通下されよと。座敷をうつて
下座ハかをり。別当を上座ハ拓じ。ゆふ時ハ別当見ハいかなる事
ゆて。母人の機嫌といひ皆おまドまりての酒寄。そ此代見

まハふしんぬとのこまへだ。母人ハ此まだ別当ねまハ和なるぞ。又夢
我初かより此苦労まなされ下され此事子ゆゑやゆさん恐ぞ
此子も同おの此不便。十郎そこを河津がよしみをおがしめせだ。万
事此熟を化事なりし。其兄弟が此さび富士の此狩の場
まで。年来ねらふ親の敵工夫ゆつゆをしゆびよく討て。今日
古郷へ立かへりし其悦びの酒宴。母も先へど下され酔に絶
ぬごとく此事笑。後生ハ起ず今生までの悦びハこれまるこゝ事
ハなし。別当ねまもお悦び下されて此去筑をめしけげらも下さる
なしとゆゑ別当母人ハ何代の始ふぞ。其十郎又郎兄弟が何
しまへ先へ来るべし。おまりの歌さまもし狂気だしまれふかと
ふしぎがましう。母人ハ字とがめ。先ハ宮おまり兵衛ゆゑ此家と

いかでさやうまのこまいぞ。別当何女人が十郎又郎とや。先ハ家
来の鬼王国三郎。君まだ村子為ハ上羽乃蝶の素袍袴ゆさ
しくまく人兄弟が若周を何とて下人の身として若しける
ぞ。其上夜如何家が死後よのとりて何の西国ハ命をなしむ
此奥者と此ありしわいて鬼王兄弟さしうつむいて別なし。
母人ハ何夜如何家ハお果しとや。それハ御り愛なるか愛なるだ
さあてうつくふ人まりしき。兄弟といいなり家来の鬼王国三郎。
育ふる此母我わざむきしハ何事ぞ。譜代の下人の其方を
とき。世ハあるき為我の母如とておかざる事ハ奇性さよと此様
嫌家様じゆる。時ハ鬼王国三郎此前をさいて素袍袴を
脱たくんで。母の此おまゝ重手をついて申上るまハ。只今をまゝ先ハ素

袍を着しめる内ハ恐ながら此兄弟を同おかゆうに脱ゆ
たるうへハ元の鬼王周三郎なり。我に此兄弟にハさいぜん我く
抱かゝり仕るゆゑ。歟我志ゆびよくお討なされるに。猿倉殿乃
此鶴陽ゆての粮籍とて此所中ノ我上あまた此兄弟を討と
めんとさとみしとのこゝぞふかぎを行ふせ給ひるゝ。中ゆを兄父
御殿ハ。孫て此契約乃事あらしてゆるんの四郎太郎殿にお合。
栗におはらふての揚貢つゐに太郎殿乃此手にかゝりて我討
れさせ給ひぬ。又五郎時宗殿ハ此所ゆ召ぢかき粮籍とて又郎
丸がだましてうし給ふ殿にだきさとめ。それより大ぜい立かり。子
筋乃縄とかけて。わらう鶴三会や時宗殿ハ縛られ給ふ。これを後首
討れさせ事。我く義ハ此兄弟の敵討のお供ハ仕りたれども。

敵仮法〇を討殺ひての後倍せ付らるゝよハ兄より形見乃
恐ぐを持いそぎ古へ爲我へ帰り此母に此事申して後ことく
を仕事とおもひ出さをいくらびかへしてぜひにお供と乾ぬれ
ど。死ハ一旦にてなしやもく。生ての君ハつらしがらしこれ兄弟の
出ことだあまり辭しがらく。此形見をもちて死帰り兄をもとぐ
さまにゆとんをいかでさすづ二乃実母へうかゞいかれだ。御に爲我
此お姉君などあらしてお歎きをさぐめらまて我くにかくたらふ
ゆて母人母をなぐさめゆせとの倍せ。まうへ私生此兄弟に死ぬて
恵細仕るに。其形にてハかへりて急死なりとて此兄をかうなり
此主人の素袍を着しゆくりいづまを母乃此歎きにまさり
て我くが此家詩乃お供にをくれし無念さハいかだかりとなりしめし

下ばるぞさ鬼王兄弟男を無くにまとりつけて落涙かきけるか
まけるに母人ハ今さらにあきれて抱をの給ず。忙殺さしてうつ
なきあさ母を別当此らんじ兄く仮此時家に行かせゆきん
と。老母乃手紙さり同宿に打せ来らせ給ひたる。倍牌をなで
ませ給ひ生死此掟ハ釈尊入滅にてもひかさらめ給ふべし。
かならず歎く事にあらず。絶くもひめぐりして此らんぜよ。敵を
うしぶる内に兄弟此内一人にて病死せるか。又ハ敵乃仮つ〇
病死せだ兄を御念をなげかれしきことをくやむべきに我に仮
此時家ハ年来乃大望をとげ。寧人の男にして高家此仮つ〇
を討たるとて武名を天下にあげたまだ歎くにあらずかなし
なからず。其兄弟が母にして弱者の女のごとく思病に死まを

住りけれいまだ無妻なれば。こゝろ[illegible]をめぐらし。
江屋門が妻女とも妾とも住りけるうへにて二の文金を蔵
さるをもあげけ。そうしみをふくむとび。ちげむ口を討給りよ
たのむなるだ。よりも引中事をべからずかならずは髪おろされてもは
はまだそ如がくうしさん庭のなどやかれば。おねはをしき事
を使事なる。此男女事なるより和に勤めれ時ぞに男に沙ぬ
撫文をそそ。是事にはん庭をつくしけるに。今さらさらは此事なる
ぬ事が如べきか。鬼王度ハ武士の庭ハ存じなほど。女の義
理ハ文盲なと。面を挟じて謀ず。鬼王いかに抜きれ
せしがあやまりになれ。貞女あまりにまたんへどことハ。さしこ
をあけし。雖えたやうもとよりてくるしからずかさだ。是如は

老母食。河津殿の後室なれど。此ほん事に親の敵を討せん
がゆるに。ふうてび曽我殿へこそうせ給へ。さるによりて此たび
此ほん事なほをとげ給ひぬ。此吉例をおがしめさだ。鬼王め
がゆ如く又の夫を持給へ。是賢女の知極えと。年て義剣
仕ほだ。別當にも此如鬼王がゆ条とおねへとてめ給ふ。
いかにも曽我の吉例なほだ。こゝろ又の夫をもち
敵をもゆびよく討せば。如など庭にハ如まじきと。さすが
傾城のまそとそ義理よく通じて敵かし。然らバお名をもわるくあんと。
世に安かれしおねと木濤と今ゆべし。桜の曲ハ女人虎ハ女同道
紅根山へのがりなふ。二の文金蔵おねとは佐中鬼王難波へ乗りたれば。
國ゑらハ縁念へ[illegible]と。三方へ[illegible]一巻終

東

尚濃曾我高名松二之巻

同様

㊀ 苦悪指引性判金乃商賣

附り

郡新人ゟ大津絵

瓢単で繁おさへ代置

塗笠れうげき者

いち孫だ後ふれの町人

(二) 宿無乃詰人魚の色ハ青物屋
飛御ハ子里をうぶ鳥おのよい嫁
附 入桐乃積ハ鼻紙袋口のさけぬ思

(三) 筆出て右の手紙進上猫かしの長物
傳奉を繼べる紫新屋の恨表面ハ化人
附 兄弟形見乃卒去婆内ハ手代住をの無屋

第一

昔魚拾ふ恨川令乃商賣
附 郡ろ人ハ大津絵瓢単で繼おきへの盃

漂澪の事ハ延喜式に出て。ふるき難波乃使りとも
なりぬ。小ハ長柄乃橋柱名乃ミきこへて。大江の崖を
商家乃去蔵いろ也いくさして。田蓑乃しまの天月
夏ぬ也にしん。今もゆかりて酒のんで飛ふて寝る所に
定め。見せ格子ハひろせ萠黄の暖簾に紋所ある
もなど。那の町屋にハあらじ。されば大坂といふ名を漸く
天正の末とれがへし人おほし。万葉集に津のくに
乃大坂といふ所あり。小演中鴻ハ六十餘列の大名屋
安。名代蔵本かけ屋。用安乃町人不所袴をたる

さず。仲弓菜履を入れ中ぬきの入菜履をかさせ。姉
乃趣び西乃堂のしみ。絶でたゞ置らるゝ所にあらず。実
にひかり屋治たちとて湯所乃居宅十月口。夜見せの蕃
諸橋本のふしなし。表座敷に粉飾雲実。奥ハ出流の大
座敷。園葉所水屋乃をのずき。南流の掃庭思ふ乃
小松志ありしく。水鉢伽藍乃時代乃苔付牝籠の火
袋。笠地獅を生乃いきかゝ。代々諸屋敷乃令張を包
入ゝ仕送り乃御用。何事にてをさだけずといふ事な
し。次第に家懸昌して大坂表智乃旧天王。渡邊橋に中
屋敷を持て。天海尊根源乃初をのを実にてかてなす所
に極め。其外の下屋しきハいく所にあるといふ所にハ令張も

あるものと人にいたることを第一治聖の家業にかしこく
諸人に恵敬ありて。お屋敷がたに能おもひ也。穏舎系
勤交代乃西国大名のお茶にハ。所出て此料理を下さる
をあり。時服名物を以裁仕るをあり。所理にて此男極里
にまゐりて粋といふれ。むつかしうものまてどうをなりぬ
といふ人の諸分。諸とつて見事にさだ令を人にやり。又さて
なしによへめにをあふ事。女にハ手れぬ果能うらやまし
きせりし。折ふし八月乃大代りに小国乃夜横此塩地なさ
るを。日法乃此月かけぶりゆへ。大津をお送りとせとのはなさ
あこがたく。此機嫌のうかびひ札乃辻にて兎尾能はいとまを
を下され。冥加かおことだ治聖の身に所まりぬ。此見てて

ゆて坂へ我まゝに如てもやく大坂へ内ゝんと家来に用
さいひ付。志だらくたゞこ屋といふ家の小座敷に入て
持せし樽乃口切をりゐし。宿乃女に代ついていふやうは。おまへは
大坂山陰屋治れ分会とゆおうしてはなさう。たづねて来れ
と隣座敷乃お侍会乃出さなされます。如何ど方たは山陰
屋治れ分なるが。何所のお侍会ぢやといはせもたてぞ。八まん
是へく治れ度方たなるゆゑ。乃乃旗をあけ給ふは。おして
お国下にて蒸料友右衛門宗長の侍御蒸料幸助会。益度
極まをはさぐんよくおまへまをは堅固にて珍重これ
にるず。扨けさびは何乃出用ありてのお出りにやとうづ
されたる。幸助されば且如がけさびの用事。もれへ万事お疾仕

出とゆせしゆへ。其方へんざしてよる所によい所にておめに
かゝりたり。其後出存じの如く志げ宗義先妻にもなれて
乃ち。お慈のうちより嬢姻故とべしと。是さいく所の四事
の如ぬ如ごゆきてられた。先妻義はさたしたる貴女にて。中く
それに似付づき美量乃息女なし。志しし上方には艶姿乃
姫を高に出す事沢山なし。此度揚名此義所はりて
所よりぬ。其後義々の事はさいたり給ふ事なれば。其
是より京都へ同居して妻姫をもたらべし。治なつ愛細
取紀仕りぬ。相し私はかたくしきは用りと存ぜしまゝ。ずつはお
勤なさるゝ内を同乃正月。おかし我く結と見てそゆてから
が。女中とゆこものは猪くのこものずきかゝることのなれば。詮

殿石かくしておかりかされてを。万一しげ宗様乃おんにな
ば氣毒く。なぐまいせば兄ハ一大事乃お役目。私とてを
出お侯乃おおきに無事ハむつかしうなると。額に皺
をたてんでゆくれば。幸助を候ハ氣づかい致さるゝな。是れ
が婦らを絵器にかゝせ。持系致しぬ。件の絵器に合せて
見しかゝゆるに。無調法ハ無まじ。極も出会乃入さかされなう。
先京にて吟味いたすべしと夫人かごいそがせ室宗が呉服
所お雲屋が方に居て。翌日よりあるがあいだ寝に遅
愛して。上中下京れとへ。東ち大仏安居柳原のもとく
をを。旧象小橋乃諸あふゝや子系といふ兄者が吟味して。
子八十六人をこゝせられた。さりとハ持系せし絵器に合ず。

さすがの乃女所のこゝやこにかいに極りぬ。治ちら今晩東私
まて大坂へおかりかされて出吟味かさるべし。雅波ハ西出れ
法にて大名もどりの嘉姫多きゆへ。お屋敷方ハ京へ出弱
かく皆大坂にてかしらへらるゝ事。定めて出手本に合せす
女中出発すべしと幸助を同居して。東私乃月に夫吟
乃所伝残しかけ。揚句乃時に大江の嚴八軒屋へ巧がり。
そもこよりもとぐに山陰屋が下屋敷上塩町へ幸助を落
つきけり

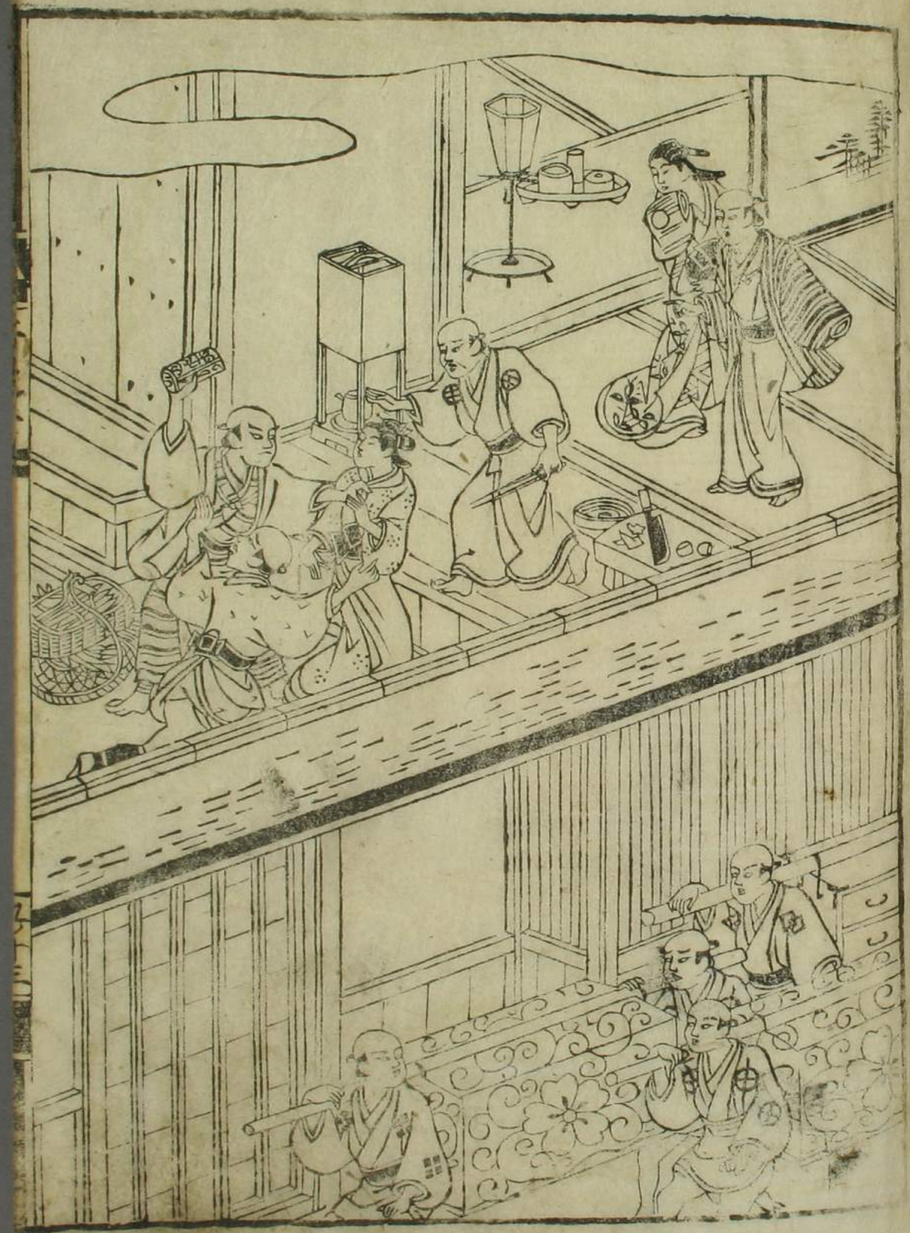
第二

宿無乃諸人夏れ色ハ青梅屋
附入ゑの種に鼻紙袋口乃とけぬ也ひ

君がわたり見ゆくなるなん伊豹山雲なかくし老と上塩

町乃別荘手ぐくまたくみなり一ツまへかゝるふ見へて銀よ
ゆくしの海も手にうれやうに。東西の風景南北の氣色。
国乃遊娘半れし。ぶるさ帝都の志なし。高津乃文を
光帯の郭公。天王寺乃晩鐘笠が呂律にまとゞ
ひゞき。長田山乃秋の夜。古我場の光り拘。生玉の秋の
月ハ名乃ゝ照まさりて。楊夏晴の蔵屋。お楊の松
乃晴風。合海が辻乃蒼雪。住吉浦の帆。前内霞鴻
の夕照いたゞつきぬ詠め。元分治れ乃が下屋敷。池の
白蓮匂ひ志とやうにして交を忌れ。汗ぬぐひを知ず
風呂乃弓深しく。墓所にハ堺の蓮網の看尾をたゞ
て新しく。奥あらいハ八百屋乃七分とよだれて隠ぶ乳

がるか男。ぐさ法分出入中なる人乃ことも入。出家目見へ
のやうすを実。私存ましさ。大名もどりの格上の出方。わりと申
入。同居して塩町に来り。かくと内鑑申されたる。元来法乃。
心利の男なれば風呂の弓を。女中にまとゞし。尚産の弟ぶ
後付の祖母にせんどちやをもてなしぬ。産数にハ幸分絵
男をひろへて床柱にさりかれたり。次ハ寄ゑ出入の東社を
敷。列紙にて嘆をもらいお目見へ女中出かけ猪
書なりて。とこしもりわし志とやうに家がらり乃掛。幽
りと少い檀紙をたんで拘ぬ。心紙こせにより。額のもへ
ぶハきまいに。鼻すぢをしこほりて。口をとゞさし
く。国つきいたゞ眉尾あがりぬ。七分さしゐてかけ



ゐるゝと。急に埒を明てまをうてだ。沈丸をつくらこんでしまぐ
に此遠町乃下屋敷に此座面をこゝへめ。若をもしお塩とあらく
め。諸事ハ七夜取りて。若がへのお小袖乃衣物を運ばせ
けるに。夜ごの事に見事なる義。大かたの嫁入などの道具。さ
すが大名などのしるしと。下々を喝して。お塩代何か
ぞる事なし。新床乃房枕何をかいひいちぎりかへせしぞ。
あけの日よりいよ〳〵沈丸の実にぬつゞけ。本宅へいらっしゃ
見迎ふだかりなり。高が手代まかせ。までもし男神。何
をあんぢる事なし。七夜いよ〳〵お風に入にかり。万事塩
町乃配夜。こしもと下女下男をこゝといり。不断お屋所
に居てらしぬ。沈丸が手代あまたゆる中に十余と

いへるものをこしまた人乃爪のたしとて朝夕手代仲間に
て一門風を吹せなるゆへ陰でふくまぬはなかりきさぬれたまた人
乃悪き化にこへて塩町乃下屋敷へ推条をゆるされしが。
此法より下にたちくらく玉といふ女をかゝる西らしさ。十条
抱心して湯殿乃口にて打つけて。くどきなれた。此の和の
あしらい十条かへをことだあらず。男が色程にいふに取ふ
せぬはさてハ和にしらくあいての事よと。まま玉がこゝろ
へ手紙入守り袋をとり。色をなの色が大事にかけて
我たなかさぬハ男れかたよりきたりし起請よな。玉ハ一大事の
ものを十条にとられ。それハさる人よりあづかり抱まて。
内ハ何やら知ずもどし下されといへた。十条乙が鼻紙袋

に納め。色がかしくバ我心にしたがふなし。一度なびきし
うへにてかへさべしとよい質をとりてにがくしうくどき
なれだ。玉ぜひに及ばぬなどたんにしたがいやさん。こよひハ
己待にてお入おかく。浄るり抱き仙のたしまりし宮中
を見合せ大裏乃柴部屋にてかならずおめにかゝるなし。
かうやからいこなたにハ遠いなし。かしうハ氣にて女に配を
かせあふなと。かへりて意乃先手をとられ。志めて且なるを
十条ハうれしく。例乃己待伽座以藝者惟口座敷に
なりんで茶袋れし。変ぞとおにこまねきして。十条
紫部屋へりだ。玉もつゞぬて内に入。さあ本屋を変てを
と常しく時。玉ハ十条が紙入をとりて。おもてをさして逝

出。寄り袋紙取りへしよ絵こぬ。而へ十氣常して追かけ
来り。女めも人々ちめと。さんぐまちやうちやくもるを。
七女見かねて十氣が手紙いたいなどよ。志ゆうとこゆて引
ちゆゆ。さうんといふ彩高々れだ。あるじ治聖つお塩も見
紙きて付。めでたき已待よ何事だと。志かられて十氣
此女めよしお薄をつかはらべし。私の鼻紙袋をぬもしし
ゆへ。服ごちのまゝよ今晩の御祝義をも忘れ。彩高々
を仕りぬとせば。何そ聖さが鼻紙へと。下女此むがぬもしし
しとや。幸それよ口入の八百屋七女ゐ合もる。一色までも姿
しと笑ひ。那の義いかにしてをんりとかし。吟味もる事
七女よ其女あづらるといひもたしぬ。七女いひまけあらばさせ

んともいひ。女の身として姿をして。かゝりよ大場の中にて
たゞかも。剃口入の身たちよ雛義をかゝる不敵ものよと。
背紙きてかゝにたゞきかれだ。何とて紙よねもとが致されて
ぞ。十氣夏の鼻紙入紙紫部屋にて取しを。浴しやうも
ありといふ時。治聖つ元ハ実所ありと十氣を引よせ。其方
ハ取中といひゆくなき所よあらざる紫部屋へハ。何の用
ありてゆきしぞとせんざ何もバ。十氣もりつまり雛義
の神。お塩ハ此此吟味を私よ下はるべし。定めて中よりさ
傳案同士のたちなき。志ゆもの事のるてのちうだち。紙の
ぬもとよハあるはじと。治聖つをなぐめ十氣をいたはり。
むがせんざの俺云。いろくひとりのんづかいまて。治聖ハ

擾婦なをりて別義なくおさまりなり

第三

筆止て右の手を至上猶なりの出掛

附り 兄弟の卒去婆内ハ手代組せの包屋

殘急の波れおくつびに。殘れぬへき袖の文。深くむ源ハ人しらじ。翌日ハ此屋の中宅に埋れた。十氣をたゞめ列のお姫伽等に結結りぬ。我に今ふハ下やしき大名の御のごとく。抱しげりふ。下ぐも臺所に合ものを拵にして。愛えてたのしむ折をうかゞひ。お塩臺所ぐちの腹簾をあげ。玉男がある事れとの語せ。りしこまいておくへだ。お塩戸をさし屏風引ならべて。玉内へ玉を拓じ上座にかをし。我身ハ。ちらくふ下へさがり。熨斗具布を拾上落濃しだらく袖に

しきして。我に敵の為に世代お思ひなきることハ中かがら。一国一城の反食の御姫食が。町人の下女もしぬとは男を畧させ給ひ。愛にもむりしゆなじなきこまさをあそぐさるく事。又と世にためしなきゆ事なり。そうへ我お十氣が異紙入をわきませ給ふとやうけし次第。所ハ業部屋と取りて推量仕るに。やごとなきは男食とも知ず。十氣執心我かけなり。業部屋にてひりこぎせんとせしを。ゆるせそ迎給ふなり合にて。ゆるが紙入をとらせ給ふものとなしらまぬ。相し元につけても勿神なきは事。七代は主人のおまへをちやうちやく仕る。心乃外なり飛恒やうかしくなじらるべし。元場所あしくゆ紙さとられじとなるゆへ冥加を忘れし所為

れ名下ちるべしと手を合せ。我男乃恵介に七夕が俺云
さえまじへてぞねがひかるされば家の京男をちりに入て肌
にかけしを。十氣意着をいひかけ。介の男の起請なりとて
うだいしゆへさ無くなぐらすうしたぞりて云へしぬ。此後
とて至十氣が不義をいひかきん事。氣のどくなりと御
難義におぼしめすも斷ぞうし。而へ治聖の本宅より寝に
かどれだ。お塩は玉に至し夜の見したりし神にかけて
なし。宮あよりいひきかせし事をよくがてんせよと。玉を基
へおし。我男は治聖がぬぎすてたりし。羽織脱指扇など
を行とせけり。治聖は此八百屋乃七夕は今約宿へ帰りしが。
いまだ来ぬりと尋けり。只今七夕来りしと揚手よりゆ

出るを見へよべとて治聖の七夕を見しよせ。其方が行業し
見ぬお塩事。いまだ名じこなきことはいへど。我あるん庭を
見庭しゆへかくもお談ゆへ。男もとお塩が中に子成書
重なし。見急ぬ事とおもひべられた。人の命は知ぬものにて。
限分男も息災にはあれど自然の事ありてはお塩事侍り
ゑまじ。子と書子を定めてくれよと頼まれだ。七夕事ぬ
義なり。四つに成男子疱瘡も侍りて生れつきいやしからず。
親もあしき筋目乃ものにあらず。愛全なども持来仕る事
此君より私を頼まれ。いづかうへ知れきしくれ給へと申義いなど
とうかぐへだ。治聖のそれを一ぐんの事と思迷そ尾洞ぬ
ちからば今晩同居仕るべしと。七夕は我家に帰りにけり今

を七人殺来候改め。其麗乃大小ちん深の上下を
若し袁子候ひそかにめしつ連ゝ。ひ下やしきの下男
下女たちに。内と七人が手者乃者を行賣出し金をれば
何の意も無ゝなりけり。治屋つ出迎ゝ。七人が神おれ候
に留りしを見て。仰例大ゝなるず。時に七人常にちがへ
脱せば座愛に是をめて。お塩に申付て志とねを志りせ。玉を
よび出しまうへに請じ来り。治屋つに迎ひ今は何をか
はくまん。其にこざかさて先し焼玉といふは曽我兄弟の
姉君二乃三やさ有り。又 貝分義は鬼王と申て曽我は兄弟の
ふざいの下人は お子は又郎時宗れの江一子金藤さ有り又元勿
お塩といへるは弟を兄弟が従弟。木藤といへるとかねといふ

名をかくし扱ひ方ふ霊にはじらせんは二の家人を下女
に仕為て木藤を三方が妻とし弟も八百屋七人と
さま候へて。此所へ入こしはなりの義にあらず。三方代
お入仕る慧井ノ荷右衛門は亡兄の敵なるによりて。兄弟
は兄弟討死の義弟を生き云して。志ばらく死をのがれ
女程を付しけるに。此荷右衛門家族付申せと申によりて。兄
弟生死を引ゆれ。其と命をかゝへ候れ敵を付ねらふ。しかし
此荷右衛門家は女程とちがい。其一兄をもごあはせしかどの手
者勇亂のものにて。其に女つ申ゆるびて候ハ弟に見わつ
て用ふとびしく技によりて。中く急に御屋とげがさ
し。さるほうて三方代者乃ミ志げむ申にたらんなる女

くらべしく二の宮殿御ちゞめ始くしめ時宗の世
悴を喜子に致し從來乃木陰と夫婦になりやうさて
うへハ他人にあらず。親親の方人致し給ひるや。それとも
他人ながら年來の名深をもひ。しげ宗をかごいやさるゝや。
案うけ給ひるべしといひなれど。治屋つも案に及ぶ。此義
大くこまいつぜやより推量やうるゆへ。今日本宅へ来ると
やて寝所出て人をゆし掛者一人東の畠をつくひ裏の
生垣をくぐりて前栽の桂辺より立ぬせしに。お塩まを
奥へ招じて主人の神に敬ふ。まもおとひさぎを守さづけ
てんの威じ喜子致したさしハやぬ。親親の一味をなる
れ他人のしげむ反にくこせんやうハなかれ。私あるに時分

色乃誤まて。親先乃動産を請。既に後途に立ち不
我志げ宗反親父むつ志げ反くまひ下されて後。親先の
拙嫌なをり立かへりゆぬ。此悪あるによりて。今急に室
むつ反を対給ふ方人ながらし。実に里やうなん所り。私存るは
先一旦志げ宗反へ此用心なさるべし。附ねらふ人ありと
風雪形なるによりて此知らせゆと。書物を送るへし志る時は
志げ宗反用心をしびしく致るべし。此自分反にはどいぶん
今迄乃ごとく。隠便に此方をものだるべし。那に室宗反を
付ねらふ人なかれだ。扨は虚説にてをけるよと。いつとなく室
むつ反用心蕩て池乃起るべし。其時分を得て本屋を
とけ給ふべし。私も思乃請しゆへ。一旦復をして請し悪

を雑じ。其後は又親親乃よしみによりて。此月にたゞず
ことも助志刀仕りゆ心庭なり。是全く二心なき程按に
は。此自分反乃面おまて志げむつ反へ一旦乃復をゆべ
しと。そし出してゆからさ那に不存もあらず。さゞめて
ゆさずことはがてん為べしと。町人ながら武士乃いきさ
にをとらざる胡思ようを理にせまり。志からだ其室宗へ
の書物を。我らは度持条致し。鎌倉にて那乃者に中
付て届く為し。扨おもさすものありと。未詳がいながへそ
先生る持運し其持をあけて。俗名為我十郎と名下さる
位牌。一帳高さ所にさしあげ。況は俗名為我父郎時宗の
ゐたい廉乃為に二所乃位牌をならべ。我らお果へ入る以後

みえば。此ぬすみ乃年忌を吊ひ給ふべし。則金蔵が持参
金百両此内より百両治部へ渡し。与文二の丞へ此義我に向
後おもんみて宜敷おきのたせ給ふべし。木陰義ハ係ふびん乃
ものゆへ西国にて給へ入に若国之らと申す者先立て縁組へたり。
あの方へ審にまかせしまゐらせ。宝宗が妻を抱に妻女と
なし給ふ。大坂山崎屋治部方へ手る乃居。の家へ入込候よし
我中乃女郎妻に仕立まゐらせ。方へ送りなすべし。是上治部
ハ妙なる密計にし大夜の庄屋喜助と云者乃一家の内。男
として教へし者と定め。忍ぶるべき事之と申。然がし也へ命の
仕合。持参をも此度みとりてはへ。のがる事ハ不定ぞかず
物云たがへ給ふなと。此位牌に焼香して此跡をや。

二の丞や女つとめ乃翫きやうる時。治部の筆をとりて。宝
むす子への頂を乃出情をきいて。鬼のうが手へもとし。正
俗腰指ぬいて右の手を切落しぬ。気づかひ男ゆへ
懇入もせず。私ハ子にて手跡を書ぬるよ右乃手を切
まいらしぬ。只今書おいてや出情の印に。おげ宗庵へ密情
通しぬとや。使接といひけるへ世よたのいさん座町人
よハあづからぬぞや。おいらも武士のたましゐなれと。鬼
まう在理の流に感じ。さらバいよいよ羽ちへぬ。実乃んな庄
よしそ是へあれとも身ハ縁組よたれぬ。治部ハ義理の為に行手
を落し。一生木陰が妖抱に出世乃紫。金蔵を治部と名づけ蔵の
と称しさせ二の丞をいさやりまゐらすとや

二の巻終

蜜流霄家高名松三之巻

同録

一

濡衣紙を重ねの燈は恪寒の燁

手桃燈 紙蠟燭

真実の如き男ん

附り

独旅足乃うりに疵

りちゐ乃強き挙行

(二) 心ハ立り馬埒ハ鐙縄ニ強ク支時

附り 他人の名字を通だかれぬ橋の下の物質

落水を交箱の内に十年の恩を送る一命

(三) 一筆硝上神なるぬ男ハ蓋しらる吸物

附り 目打ハ八幡竹屯なるぬ与ハ此の云付

三年かゝる寺普請日用の貸を仕給

第一

濡衣ハ紙をせるの繧ハ恪氣の燐

附り 狂猿足の裏に庭のちゐの強きを行

けしてり吾書の所ハ意をかれど足の家物心に紅せ手の奴連もあらぜひとりの旅ハ拘憂まして生死を変に定め。何事も見おさめ詠めたるす所の名ごりよりハ大坂に於しまる二の文金義少ね乃心庭。対文治慶義理の為に我と切落したる手の痛。さこそ難義と見かへる元ハ云れ後の屬が。我にもとり遠うて知にのがるもなつかしく心をんとらぐくおにまうハ漸関の宿を若にかゝり。馬備が家にへて。其此の所中を行。桃井掾摩寺家来ゆが急用に無通。なやくる我出せといつたりかゝ。亭出て去に手をつき。

りこまつて追付るをさし上べし。孝は儀掌殿見も只は一
人にて。宮おくりは出なされは事の門奥座敷にお待なさ
れは事。おまへ殿にもあまへお通りなされば一所には休足ひそば
されて下はるべし。志ばらく乃内に二辺共には事見へ来るべし。それ
お茶おたばことぞあしらいかる鬼にうち南無三寶正真の桃井
家乃侍見にぬるとや。目おに茶が偽あらはれん事の氣のどく
さてよ。寔はまるびまてはいよくわしりなんとしひ。身が儀
掌庭乃先輩てお見めされしらやざなるにてさけるぞ
とづかくと奥座敷へ通まば。三十又六乃侍なり。鬼にう
小ごゑにかりて。近比西目なき事ながら。私の義は宰人
ものにて。憑念へまゑを稼ぎに下向仕るがはらんの如くの

獨旅。是中雜義仕るに付。は自分如乃は主人桃井據ノ
ちれは海原のはま行ゆへは威光つよし。さるにまゐて主光
をはてるをもん安くや付んと。武士の似合ざる偽り私の不仕
合とは自分殿さきだりて見へは若なされ。扨と迷惑大きな
ならず。寔はは早やうかんをはて。何とぞは儀掌のやうに為
くろはれてるをはさらせ下はるべし。祚八まん先の宿よりは見
に澱て。據ノ様乃お名を謀斗やまじと。世に志ぐくと私
かれだ。の侍もさやいて。拙者もは同おの宰人者。全く據ノ
殿乃家来にあらず。給せのごとく桃井殿は海原にて此威光
強かれだ。お名を仕りて是中をんあく仕らんとうく乃仕合
志りるに宮おは自分殿見へお出なされて。桃井殿のは家来し

給せらるを笑まそうけ給り。笑ハ鶴乃どくぬ事なかと。絲
みど肝を冷して居るしが出自分家のお詞をうけ給り安
堵仕りぬ。いざひうへハ女人たるに如かど桃井殿の家来に如すまして。
るをさゝめて居るべしと左右方うかづき合。儀峯乃詞づかい
来合せて。何とてるを延引するぞと。為儀をしりまいしをぞし
まいしてるをさゝめて下りる。始終此手にて情るをさり。其中
ん安く嫌念乃入口。悪ケ谷にてつるゝ時鬼王出自分にも
何方へおらつかせらるゝぞ。不計殺しこる義によりて笑を御
熟意にあづかり。我乃儀峯のやうに仕りしに。今日別
中事相しお名ごりをしくこそ存れ。又もや御えんにて獲
くれ氣中事お乳中といへだ。の侍もしれるものにて笑

を本名ハ名のうず。作のごとくれ面道に居如忘れがうさ
仕合。掛れハ菊ケ谷乃為に志る人あゝてまゝのそれへんざし
中しかなかずしれえんおもてトさるゝなとあへさゝめする鬼王
志からバちかごろ無ん乃取りよろへ。此物語を菊ケ谷ハ芸科
の友志願へ。お席にお庵下ゆるべしと物をかれだ。如かどん
切中しかり事速お庵中取しおんやをかれと請元東西へよかれ
ける鬼まうハ扇ケ谷に香多源六と云徒者五々れだ。実におら
つき乗乃無すを悦び。板上方乃笑尾をかたり。山陽屋次郎
志が義理ぬかく切なるん庵によりて。無念なから敵を討
事延引に及ぶし。それぐれやまゝて事を仕損じて
一分立がたし。時宮を窺場所代考。笑尾能討て我名

を孫会にのこさんと。粉を見て身を合すんの内こそたの
りしかれ。鏡中。吾多源六は武運の祈らんなるに。排ゲ谷
村手大明神へ百日無鏡をたゞ免。もでになかだの歩労を
とげ。東鏡高如の誓を始んと。半夜の瑞に吹降の雨を袖
笠に乃がれて。寶殿の階を免ぐる所に。おやしや神木の
榎に釘をうゆて。かゝずん平如鏡あまと。しかも女のこゝろ
てお持ろしや人を説詛する神。源六申てよし何にもせよ。
神木の枯もる曲者。とゆゑといふて御姫せ。已いかに是御
なる女にても抱れ御理をしらべし。神は慈悲を以て若とし
正直を以て神とすと云り。己直なるを祈れば申さに神明
あはれみをたまて。まねがひ叶ずといふ事なし。かんぞかの

命をさらんとて神に神をいのり。寶樹に釘をお申かへ
て己に縁ひたらまち身に見付られし。今よりんを鏡
しさやうのおそろしきねがひをやむる事なるぞ。見のがしに
てかへをべし。粉も神津のるにおゐてさ。此木に縛りあげて法
人に願を見すべきぞ。何とん所鏡すか一大事の分の恐
事いかにとふ付けり。下よりおろかなる人のいひ事やかく源
吏に及んで女の身として。此夫に乗り神木に釘をうちて。
人を殺さんとしふものがさやうのかるべきさ夫見にして。
此大邪が出らるべきか。りとより人を殺さんとおもふからこゝ
ろうが命は寝より捨重さり。兄性のうへなまだいかやう
にも殺されよとさりとも不敵に痿痺ぞろ。源六女を

引起して悪心とはいひながらざれどにもひし一念を[illegible]
さぬはたのりし故それなどにも募りし根の子細は
いかに。事によりて三方が面目とげさせ給さすへし。膽
せば如かならずかよかりし給ふか。私は本庄ケ谷乃すゑ
に住右向とかをのぴとり乃姫に小卜とかを持給りしが。
我子かがらかたちんを人かゝへて。母の為に如べきなどの事
云幾方よりを望まれしをぜひとて有志志げ宗度後
は御本書にもかさるべきとの約束にて当分お寝居
乃事云に糸隠なりさらしかく勤めしに近は上方より
秀といふ妻をかへ見に小卜をもひかへ無実の越度を
いひそゝぐとまゝ我卜されしを小卜無念にもいふ後や十

九にてるしの月十七日に自害して此母をあとに妙
しづきぬかげきに面部立深夏に乃ゝ見るすがたかたる
朝のすべくまでも志げ宗度をうらむ心我奉しやり母の
身にてはたへがたくぞそを小卜をこひ取る命志げ宗度を討
て親子がむねんをもらさんとはおもへども武士といひ大男と
いひ此身のちからに及びがたし我に人乃心に叶はざる事は。
仏神我たのむたなし。我も此村手門神に丹誠をこらし神本乃
板をにらしとおふ志げ宗度とおひ七日に早九本乃大打を
うつて心乾をでに満て本望とげんとおふ所にかく見付
まし事乃口おしさ子ゆへに後よふ親の根神魚もあわれ
み給ひ娘が敵志げむ心が命我れて給はれよとおがりかへ

たるあの神。濱の濱をくりかへと拙がくりを。源六字て分
別しずかして如何馬場さきへつき出。打江の池のもとにて
うりて引よせ。只一刀にさしころし。首をとりてぞ立のきける

第二

心は立り馬場を明る猫縄引張る夜肘

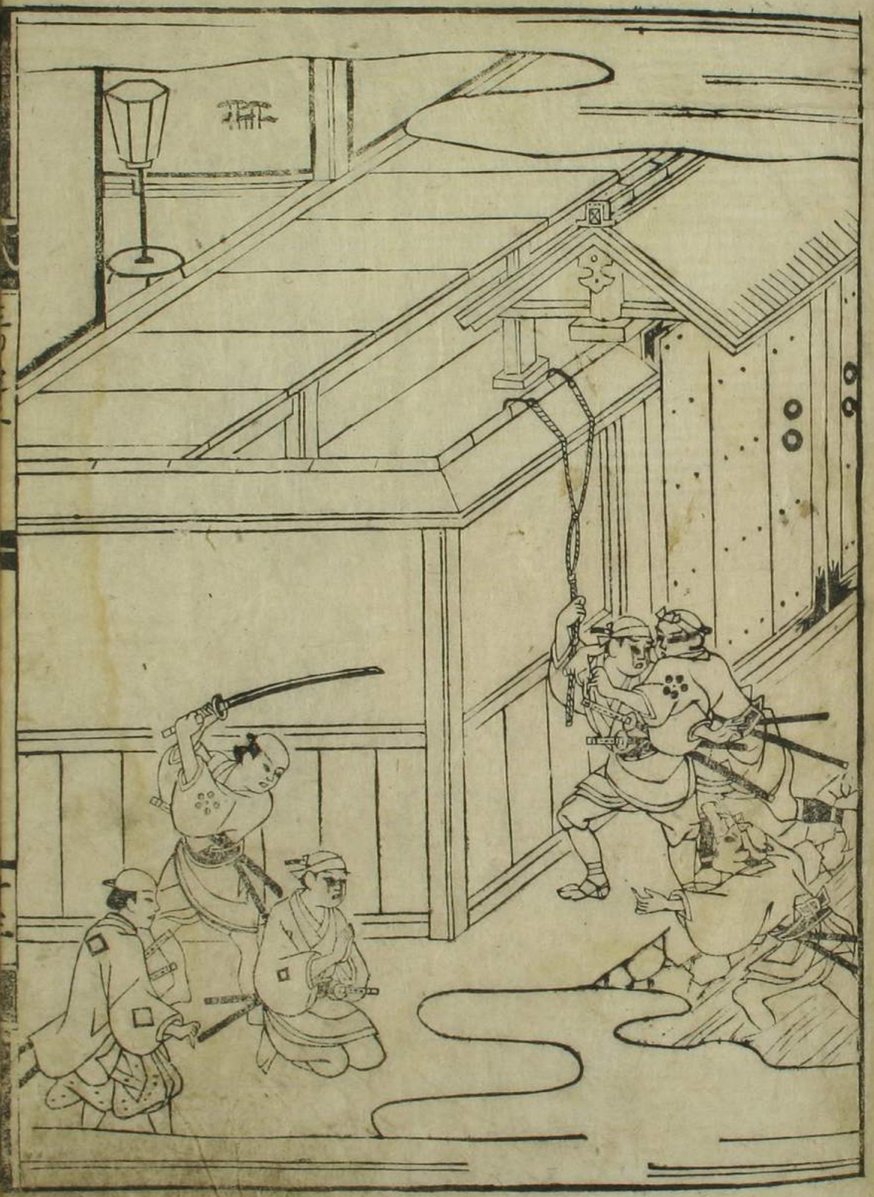
附 落水を文箱の内に十年の恩所送る一命

猫に乳をうりせども己がすがた己と知ず。心結幾筋
にまとられて苦となり悪となる。一日の塩男さぐあるさま
人情。寝に箕部政者といふ者は元来白川の山家に勤めし
が。家老分の人と口論して無理勝を彩ひ宰人して久
しく。猫食本庄ケ谷に塾居し。老母妹をもてくらしけるが。
毎月にもたがひ償を失ひ。鍋業に不縁あるによりて若下

て。合刀を請取出のわかる。老母かくこより告来るは妹にも
事。ぞ人わらず此ノ夜を変む実の越度をいひて勝手
出されしを恨自害してもてぬぴとへにしげ家夜のむご
きん庭ゆへなりまじ。もやく猫食に帰り。妹が懐をやもちこれ
よとのふことを見て。人に何ともかくうずひそかに猫食へ帰り。
事の実否をたゞさんと。今日あらはせしあぬ。打ちし関の宿
より猫食の入口を同ぶしたりし。待しげ家への姉箱庭けれ
くれよとたのうしゆへ。幸たるたまかりと文箱を請ぞり。蒸
料亭へ案内して。元服をもりておきたり。しばらく聞うも
をたちらふ所にしげ家役に逢ふべし居りへとそれとの
義。かしこまりて政者の猫のこゝろにまかしこまりしげ

書物紙原続して改ちらをひらに見へらるしからずと
膝りしきちかづけ何男も討んとて付ねらふ躾あるよし上
方をも風雪して治聖つかの頃を物し熟き祝ふせり。
それはまづいかなる意趣にて男を討んとはせる事ぞ其方此
物若物系中からはさぐめてやうもをしりつたん。かしくかされ
とさてやく時。改ちつ案に右遠の文神今ゆられてめなく
ぞるを志げ宗隠と物ひ書面を読きるせいろくすも
てたづねかる。改ちつさてはかのあづまの侍秘事を知て出物
に隠送り志げ宗に秘を討さんとする頃を宴は陳じて
その侍めにぬりつかんと分あしてかさづ口ゆへ申上る此自
分自を討んと付ねらふ若は。和のものにもあらず此内に

めしをかまさるにもが兄妹にはいと母を下されし根に
よりて者をとげんと謀のよし上方をも風雪あり其
兄が形魚をうけ給るに。其比廿七八文白にて細面之力量
あると見へて裾をあして肩いかり。中賢の天窓に狗兀をり。
眉尾あがりて眼くぼミ抱いひかとやくらにて口とさるや
かなるよし。お走に此内説ひそかに申あげよと上方にて申
付られぬかならず。かゝの男の紙は続なされなばとなるより
理不盡に対てとてらるべしとぞ申けり。主宗委細雪
屋けしにもが兄なんどあが。此志げ宗を討ん事をひも
よしぞ。まづ其方体足仕事とまもなげにあらひぬ。改
ちつ私義和に於く用事申付られはあいさ。我出て お弁友



よしいかにもんまかせとゆるしかれだ。政考ハ産業のてい隅
ぐまん紙つけて室宗が産業を出。それより本庄ケ谷に
立こへきけだ。母人を取お何者やら。打口の池端にて格殺。
首をとりて迎しよし。政考ひねんかさかるかぶる地に。
母と妹乃ゆれひとへに兄も志げ宗が取為めべし。宮おに
此事愛よりも志らだ。志げ宗をゆるしまじきよ。まづ母人
乃はめよかり。妹がやうすをかりしう取りてのうへ。葬憤乃
愛ぜんといらざる事よねちゝやくして。一方なるね敵を討
のだとる事れむねんさよ。かんや案内人をきたるだ。志げ
宗がやしきへこよひ忍びこんでなるとぐだしおかし此
初月ふきびしく油断あるまじ。何とぞ方役をかりてなる

とぐべしと。肺肝のくだし砕くるばかりなりける。されば
軒端めぐる琴滴とかが声し夜の驟雨かく。時ハ八月紙
かゝし人ハ着見る小萩わらし見付の並木をひぐらし継来
たへる法実改太郎を菊が首によせけり。着ちあげ宗が
門外またくさぞき忍び入りさき支度ある塀に縄ひつかくる
下をおやしや土橋の下より侍二人出。政かつどをなし右方より
立ちかゝ何者かまて夜寄に及んで。徘徊せらるゝにいぶかし
きよ。塀をのりこえる狼藉にまぎれかし。今鍛衣服
不思かりだ和殿を見てそて押へ取し。此殿ハ已
ありぞやあら井の前を取とて当時世にかくれ隠び武芸
故ぶからかき今宵をうしかりんよりはやくゆれとつきたる

もて。政太郎ハねこそあげ宗周んしてかゝる夜風の秋ハ庭出
の外に用つけを亀門戸を守ると見へけり。今宵や何ゝる
者を盗賊といひて串ばまよハゝへらまで。一筋にせて立
のりんと振入りさるよもうりと刀をぬきかれば。両人仏光
ともに合す術を宗おの力足と遠膝病かるやりかゝ。切殺
すまを及ぞと。政太郎ハまうちまたくきつゝれば。両人へひつ
ぢりしてとりてゆせ已刺くぐり庭にのぞきわまてん命
もてかゝし。それゆへ膝れし袖よらせて頂をとらへ。
くらぞく人さんと出る一家よかとびすぎたる亀外とのいへ我
が侍が盗賊の攬のとのまそてたくまる身を探りして。八大
量の先もせず。刀よどうしとハれ中へ生討てもとつるぞ。宛

慣せよとあんぬいする時ハ又改名ハ全く我盗賊ニ所ゆゑ
事ゝ乃いひぶん何とゆゑ子細ありがふさこゆるなり。大臣
ある男と所望だ乎乃事。ゆゑなんして命をたすけ給ハれ
武士が盗人とよだ望ておもつる事無念といひ。ねがハ所る
某ゝ少分なへといふことだ。何とゆゑおがへありと思ふ心
案して。魚を引あげよく見望だ。関乃宿より思ひがやり
を同居せし侍ゝ。是ハいかふと引おこせだ。扨ハ其所方にて
見けるかや。扨ゝ不審如事こそあ望。此自分乃粗れし書
物志げむ○へ庭しに付ねらふものあるのあいだ。男をつゝし
先との文神ゝ。此志げ宗を付ねらふものハ掛者なるが。何とそ
此自分ハ此存じなされしぞ。私ゝ乃居中にて家名さへて

みし。某が内儀を志げ宗へのおもらせ。やうすをうかり。きか
ちるべし。掛者事今ハ何ぞかつてまん。箕部改名といふ
ものにて志げむ○為に妹ハ自害致し。又老母が事打江
が此乃儀にて。我中に指殺しぬ。是も志げ宗が所為と
いひこれといひゆるされぬ。歎ゆへとよひ乃風聞を事に思ひ
入んとせし所を。なのゝ志げ宗が家来にもあらず。いかなれば
強毒して我ゝとがめ。此所ゝさを大切に致さるゝ心應万事
ゝ得ぞし。おゝ王此不審此也。此男乃一大事をうけ給ひるゝ人
に。我ゝがん應を隠し申すも居理にあらず。是ハ先年歎
ゆゑ○を討て。年来の憤りをやとめし。曾我兄弟の卜人鬼
王徒弟百多源六といふものなり。此室むゝ○ハ指南る歎ゆへ。

以後に討べき契約にて。此女人死而我のがれ時宮を相待
而に。志かくの事によつて。山傍屋治なりと名へやくして。
志ぢらく志げ宗を討事延引仕る。志かれば。こゝ君志げむ
が身乃うへ心りとなし。かれさりにて室宗身に憐わり
てハ我くが武士乃なかぐしたり。勝ぬけに如たつる事なか
しく志げ宗りし病氣とさけば。手をまはして本後をたら
らい。何ぶんにも我くが討ちるとハ。大切に存る室宗なれば。
ゆゑに無風の事ハ火用心までんをつけ強義を致となり。
どいぶん無るに生意てやがて討てとらねばならぬ敵なりと。
逐一やうすをとりけり時に又源六すみ出見改名つ原は自
分の老母我討しハ某之かならず志げ宗が而為にあらず。細ハ

掛ゆ志げ宗が身のうへ安穏なやうにと。討手大將神へ百
日氣籠乃わらう。此老母ハ神木に行をうつて。此身を
を離ひ給ふ。志げ宗をのろひ給ふ事を。此夫兄にて居ゆ
たまはず。中くらひこまれし。念無殺さるく風情にあらず。
こゝ命をすてゝ乃詛詛なれば。神もあはれと給ひ願
むなしからず。つゐにハ志げ宗をのろひ殺し給ひん。さ
ば我くが手来乃なき。誰をうけて主君への事ハ仕
はいてはしらハ存じながら。つゐにわれが此乃たゝにて手に
首ハ無函ちへひそかに葬り。此あとよ終しく弔給りぬ。
やうに名のりやすうへハ某を討て老母に手向ひ給へし。
くれぐ室宗ハ此自分乃敵にあらず。ゆゑしをかれ異五兄弟又

討せ下ちるべしと首さしのべてうちけり。改たちいやく
源六反は母が敵にあらず。それをいふに主宗に恨
あらして志げ宗をうちいりされしゆへにこそ。おまはいかけ通
たり。此外にかんぞ是母にそ起きて恨ひまべきや。されば
志げ宗こそ誠の親の敵なりとてがそんせば。源六いやさにうちぞ。
行の雪ぬるらへといふ人にはかからず。雪はもらふ人にかゝる此
理。我こそ是母ぬまにかけるれば。いかで討給はねぞとつかれ
ば。おやまつたりと。母の敵にぼへたりと源六が首を
討。改左衛門は親の敵を討ことばかりに命れ入事なし。孝志げ
宗が教内の案内存じられば。鬼王反の助太刀仕らんといふ。ぞに
たのもしき改左衛門反心底屋安の手あてを頼むといへば。いや拘る

は改左衛門にうちうず源六なり。源六我し名のりて討ましん
は主むほが命をたすけをき。鬼王反に本望とげさせんなり。
こゝ右と孝とをかんぞ。討をしき侍の首を討てもそぬ。此案ぬり
といひしは実の事。我かなうず改左衛門にうちず。源六なりと名
のりかれば。鬼王うも感源志ばらく此かしがさかく大望
の我く。人に見とがめらまてはあしかりなんと。我は源六が死
請を与人してかき。前い扉がやりへぞ志のびかり

第三

一筆猪上神なるぬ身は蓋たる吸抱

附り目打は八腹作走なるぬ与次のいひ付

名はさでまいてそ人なし。新たいづまれ人の墓ぞ。風のこゝ問ら
月のこゝ昔の友死は根にかへり又春に咲とつゞけしもがに冥く

箕部政右ハ源太と名をかへ集がんざしと絶鬼王兵力を
合せ志げ宗をねらふ所なりこゝ人のかゞみ如べし。其時慕
外ノ義者重宗ハ鶴ノ山紅連ゐ乃造兵を事行しとぞ。人
夫をわまるゝめしとせけるゝ此時鬼王園三郎いかにも日用に身を畧
し。舊請場に入こゝ重宗を称ふいまつて討べき事なれば中く
さふ所なりと。用心仕る身ゝてもかゝる役儀をおいつとむる事
ゝ案ゐけりての事如べし。なまじかふ見ゆるゝされて。安念乃死を
とげてゝ亡者の所ふくしゝ葉の新る唯荷甲斐なくしかべし。安
ハ隠分身をしのび乗り合ざるにしくハなし。とさら古例をふま
平家の侍恐七氣京清。重義の恨を雄りんと。粉紛郷を
大仏修理の場にて称ふいしに。校父重忠之を見ゆるゝ

絶にあるをとゝげすゝ。やゝ此事なし出ては寺院乃舊請
場にて。重義の敵をねらふ事大不吉なりと。女人塩恐の胸に
手だてをめぐらしけるゝ。いさまゝ女人が推察にたがはず。志げ宗舊請
場に隠し勢をこしらへ。人夫乃中にハ己が手のものをあまた
まじらせ。馬乱の日用ゐる時ハ口笛をふいて侍をあつめそしつん
でかゝめ乱べきを手だて。才一元を謀らん為にハ此事行をひらす
らに乞請お勤ける。されば事お湯ゐる事何のくせものをも見
出さず。世ゐの風雪庭説ないとおもへ。人夫ハ此うへにも。いかな
る孫やあるらんと。身心所ゆゑいなりきたるゝに事をて。うつ
の文孫法師宅へ。家の絶く集り。饗應の酒興一座
ちてゝ出されしハ家来乃ものをとゝ大庭に出し。白人

お撲こらせて見物せんと。亭主へ申されければ。[illegible]
は[illegible]方分の[illegible]。全く物[illegible]やまは[illegible]ねど。組親[illegible]
志げ家[illegible]へ。卒度お窺て乃うへ[illegible]仕りたし。申ても
力業の[illegible]。慢我[illegible]まじ[illegible]のまを[illegible]ず。[illegible]
まけまつて不升[illegible]に[illegible]出来まじきとも申がたし。与
親にお[illegible]しうへは。自然の事これありても[illegible]
停[illegible]申[illegible]と笠原平[illegible]は[illegible]
いち蕉井[illegible]は[illegible]撲がお好[illegible]れだ。[illegible]入[illegible]
に[illegible]べし。[illegible]は亭主の役[illegible]
[illegible]へ申。[illegible]一面[illegible]出[illegible]の[illegible]撲。[illegible]
[illegible]も[illegible]功[illegible]のを[illegible]

ず。笠原平五度お与以の重むすめへお窺よお出ありしが。無
個法如義をやしきたらるゝ人かなかなぐ無用に致さるべし
とて。大きに御志りに河いてお帰りなされいづまも俄に御
不興になり。兄は与以たる人へうかゞはぬ事なるをおまり念がへ
ゆるり。内院にてハたるしかるまじかれた表向に断てハゆる
されぬ筈。かさのてもあべき事と。諸くりしこうらぬ人ハ。
家にそしつとあい。急におたらなさるとうらけるお撲の
事ハさもなくもあ人ハ寛れ山に入てむなしく手を拡まま
へあげ。武運いまだきたらずと。図三郎ハ扇が容に隠れ
ば。角平ハ主人の仕して。お念なりと牙をかめだ。他人を
己ハそれなどにかゝるのお撲をとらいで御おかいか。近日身がや

しきまして。お撲を真行もる物来致したり。其時も
揚ていづれもへおめ小かけよ。さぞ名て慧料反にも
お出なさるべしとやさるに。角平咲を含で見へけり
を。他人をハひたもらお撲さらせんといふを。弱悦ぶとおひ
けり。神なるぬとハ兄弟いふ。諸人を接角平ハ右ゆり風を飛び飛る。
源六ゆ殺なりしかいもなく定めなきこと

三里絶

當流曾我高名松四之巻

目録

一 眠拾乃鞘打破ていふ男乃恨
　　嫌嬪を武藝のこせつき
　　あらはまなこ示派
附り
　　子代拾乃親のむを見
　　夜乃事加

(二) 裏門の漆石堅ハ紛来変改男

附り 抓出した後綿やうなる 俗名多

力落した人は精をつけ八情出場

(三) 六十に及んで軍出口上をひねり 誓

附り 忠孝の絵る切てもてゝる 袖を服織

七ッ頃皇を振袖縫紋ハ令れ乃立

第一

脇指乃鞘打破ていふ男狼

附り 鎌鬢ハ武藝のうせつきなり服は涙

牛の紙はかぶし桃林の陰。り絵こしにも此前の壱

しけりた名し。いでや伏見の山を歸の尺せて。寒けき

月と俺しも去年の噂よりぬ。対さう西行上人

のかりのあとなりて。思深寺の桜満香氣をだらん事

今朝の忌ることいふ。蓋の垂きこそ人のんを出家なり。

引の事の珍者にぎさいしく。往来の旅人袖をとり行ふ

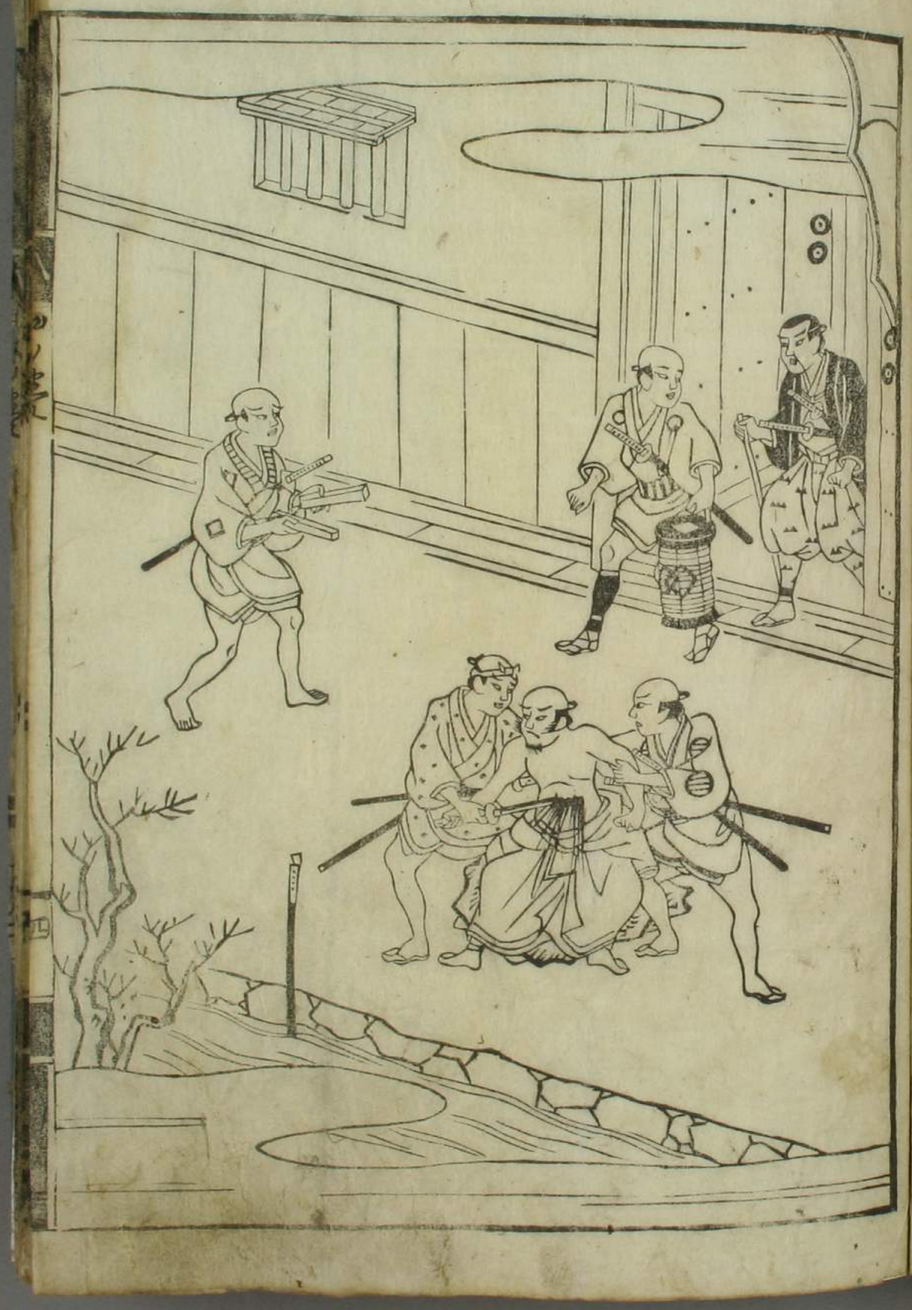
もの海原だし。実にむかしハ出去町とよびし所に場

丹秀白といふ所科あり。もとハ英俗久栄の家に

相勤し人なるが。一分乃外親類の事に横子なつて

宰人せり。爰に為我兄弟後幣りの事に。家のかたちと云者を。
歌おもひ紙気毒に忘ひ。大聖老たちと名を幣。秀白聟に成
ゐるりしが。国紙欠落してより世に淺ましく成り人気に背
きし天罰。くるを現世にてもやく雑ひかるぜおそろしれ。
今は世に捨られし身の法師にも如べき事なれど。捨
れもしれ落ぶらず。こまく昔の穏質。頬つきさいうし
ねがらんの脇病なりはいかなる事ぜや。義をもきまへざれば
恥を知ず。秀白かたへ弱来り對面のうへ中は。臨くん座の
遠いしゆへ親類一門をいふに及ぶ。他人は粗瓜撥して
世にいとなく身と如ぬ。定てゆゑにやくりとも薬しを
まじき事なから。慈悲と思ひ今子を合力頼むと。それ

にて家をさてのへせめて飢死もしるた。お家乃すがたに如てお
果さく。恥をもすまのめくと色へ乗りぬと。先性をしやむ洞
野さをあはれにぞやけり。秀白かたと合力致せしや。如かど
は自分へ合力いたすり孫をと。急にありし根拾をとりて
ぬきたるかし。鞘をきりて表たちがおよ重。扨くは自分には
罰乃当りやうがすくなし。親父のは悪を忘れ給ふ乃ミか当
我兄弟年来んとつつし親の歌女理を付給いんとのたりこと。一
味渡なから命をおしこおく病ゆへ歌工者女理へ祈人して儀美
をもらいんとたくまれなれた。天理といふこの事て却て女理は自
分祈人に出られし事を疑ひ。兄弟と内談乃うへかたる蜜
事なれ。ちう場。我に心なゆるさせて討てえべき謀と推



量して。すぐに此自分を白洲へ迫し刀様にせんとし
ける我。かつ〇が侍小林平八まつさくさにあらじ。此大胆
表聖つと申さのハ世にあらびなき臆病さのまて。中く
曽我と一味してこゝろをねらひやなんど仕る不存の者に御
ぜ。儀貴にて申請んとさし当りたる歌仏より。無二乃
兄弟曽我が隠謀我訴人にまかり出しと見へたり。此紙衣
貴をさきとりくさきやのが命ハ渋たをけわりて追りへさる
べし。さゝくてハかさ称て訴人詮をに来るものこれなしと
さゝぐ外程へ見見しなるゆへ。志からだ命ハたをけりへせ
とて。渋小林が悪によりて。志りも壺中に追放せられ給ひ
ぬ。是ゆゑの不覚人又と世に御るべきや。かゝらず金子を取お

志んで申に御らず。我らへ此合力と給ふて事を此に仰て御理
に御らず。いぜんを此程聟囲にてきけるが。貴殿武士の
契約我ちがへ一義お談乃のち書子我をそて欠落御りし
ゆへ。腰ぬけ乃あく無う何を某を人まじゆり此がらく。知
行をさしあげ宰人致しぬ。男たが姫ハ此自分にをそら逢。
一子永吉をさし殺し。我も自害せんと世し我三浦与市
殿永吉郎を引取子分になされしゆへ。永吉郎ハ獨ぬけ此子
といはれど与市殿猿倉へ蟄足の柳此方へ請取壺ぬ。史殿
乃中とて永吉郎が母ハ貴殿乃刀束をあんじまづらひ。
終に吉と逢乃霜月に名だかりを称して若乃さのに出
ぬ。是此自分此弩を見るにつけてを。ふびんや姫が事を

しひ出すと恨ミムどきこれだ。義塵の返答まを及ずしてけ。
神をさらへこれだ丸腰なり。此腰指まで自害やされよと
まさせざを請ひず。秀白今ハたまりかゝ侍衛生は奥志
と。義塵が頬をしてくふたてけだ。義塵の為くれし
秀白が手紙ひてをしいてでき。相と返紙子万なるんざし。
金子万ゝ合力請しよりハ。為ときにくき男たが頬をよく
たてき請いりし。今といふ今武者の本心に魏て。無念といふ
事をおぼへ有り。御ようぶ夜の御よくしミ兄弟が恨美一
人に相にて。天者の出罰を請くきなれて。当夜に頬紙
たくきてを返答なきさ仕合せ。兄ミる我心が為す事。院
に工夜外程出指南ての敵。物又荒井ノ夜をこそのがす

なきさ者にあらず。子細ハ兄弟夜うち乃場へなり合。ひとで
めるなりしバ。ぶんじゆうに名のつて勝負ハどげざして。なん
ぞや女の姿にてうきを衣かづ身にして居るゆへ時宗女と心
侍の女ハ手にかけぬ法なれバ。ゆんをてて奥へ入給うしろより
いざれとあ。おりあべくとよだいり。大ぜいして縄めにおよがせし
をむすんなと五宿定。夜をしげ宗に御見べ。来先手ふかれ。兄弟に
だかり外程紙討せ本意を背きぬ。いまざ討べき敵主宗が
あるこそ音なれ。此者紙討てせめて兄を縁乃ぬけるいひ
まけあし。本意とげて乃ちハ早速後きろて。兄弟と一所に
かづ夜につかへん。刑此根指中請ることといてでく時。秀白空
ちなどに心底ひるがへ出るこうへハ我の大地なる。此うへハ心勢

に見えわけて猿舎へ下向をなしといへた。中くさやうに
粉藤をべきにあらず。一刻をもやく所なり。茂右宝宗が
なりたへ云二云三に踏込。本重とげて熱名代をくがん
と。まのうらへをごとく右義武郎の人代あらはし。是もいそ
ぎて猿舎に下りぬ

第二

裏門の濂石塔へ絹束変改男

附 抓出しき 後綿やはらかな 假名外

仏法に田舎の見といふ事あれて。一色の舎代己が境
界によりてさまぐに見えたる。是一人乃うごく所にしたる
がい苦魚雲活乃若別。板も大地表乃を秀白が諫に
よりて。本人にきかへりかまくらに下りし事。男乃分かれば

いかむかりの恨び。やがて本重をとげて。勝わけの熱名を
をくぐなしと世にたのもしく。猿舎乃便宜を待たり
程も神力を主のまんと。大地が武運のために男山に系
詣して。科戸乃風の吹からに任人えりまうしの拍手
下向乃打ちう。萩乃坊にて酒飯をして免。それより佐
新子といへる法師乃かたへ勤ぬ。是ハいにしへより俗縁浅
からず。何事も始終なじの人なれば。秀白ゆへ法より
大地が不面なゆへ意魚して。書信不通たりしが。今度
表乃人他を改め武郎を励むの義。佐新子に不意聴せば
とおもひ。態と実にこそたりかれば。幸佐新在宿にて。是ハく
板も久しくなきなす。先れ此塔国珍重と所に時節乃

挨拶して。まげかたのぐらり中事ハ。此自分の聟大
地長九の反乃義。隠念しておきてなされしやうとは存ずや
と。佐新中されなれば秀白驚きて。それは誠にて此社ハ。
扨も武運につきたる者なり。誠に先年乃金にハ心臓れて
一味にもづき。漸々とれ如何して悪名をすゞがんとせしに。
お果さりと取ハる世にも不仕合せなるハ拙者なり。おまなどの不
覚人を聟に持。先祖乃武名を失ひ今やうに宰人の身
となりぬ。無分ながらん庭乃などは推量下さるべし。宗家
拙者もながらへがたき命。今日が誠に此世乃はいとまごいと。
義理のなきぞに地獄を抜ずりなる。佐新扨ハ大地反ハ此病
死とおぼしめすか。まつたくさにあらず。拙僧が学友だ。隠

念増家事に取れたが。一時の出来せし書物に長九の反の義
をやうしはへた。いかゞとなぜしがたゞ今は自分乃お詞の所ハ
れだ。孫書面に知合いたり。此物を此説はへと秀白に
まうしぬ。秀白かさまして聟長九の義病死にてこれなきと
や。扨ハ本立の所とげやせしかと。又文をなをし此物を披見せる
に。追碑にハたく当月十四日乃来。菊松が谷蕉井ノ後世
反といふ人の裏門乃捨石に。腰をかけて腹の所さりたる
者あり。まへなる滝乃中に腕指の鞘をつきたて。鯉
口に書壺をたゝかゝ壺ぬ。こゝ文云乃おもしむきを取ハ
るに。後世宗家ハ文郎時宗乃敵さるによりて。討て手
向んとなし。豊和粉骨とつくしぬ事。志げ宗反ハ家

縁より此家来あまためしつれられ。ことに武藝乃家
えしく。屋敷を用心さびしく。中く我らぬさ乃ものなり
こげんとする事ハ。蛇蝎大地ハ動かし。蛹蝶車ハさへ
ぎるに似たり。さあれだとて鬱憤やめがたく。其に家が
事ハ先年工藤母理を討ち時分。一味にたづれ世に此奥の
名代ながし。そぞに武士ハさとりぬ。今ハ屋をひらがし
右義を勵まんとされど。一度乃悪ハ天ハゆるし給わず。
くとぶ運にして。敵志げ宗度にちらづく事ぬがたし。
かくいつを不右腕病乃名代請んやと。今日兄弟乃悪日
切後伴りぬ。曽我兄弟が後鬱ち茅京の小治郎今の名ハ大野
長ちと徳しよし。風雲あらして我くを取りぬ。然に

先年ハ一味ヨリ出ヲ申されしゆへ脇病をのと世上ニ沙汰
たて以前ニ。かゝる心底ニ如ていさぎよく切腹致されしす。
唯や来来にてかゝづ夜をたゞめ。当我兄弟の人ぐも満足ニ
なりしらるべし。私たちも知己ならねど。兼てうけ給ひ及
びし人ゆへ廻向仕りぬ。其僧ニハ鷹知乃事なれば。孫渉
廻向なされつゝハさるべく。それゆへあらましゆをじゆと。後もを
ひらす秀白ハ蔵派してよろこび。扨も君とゆをのハかゝ
じけなきをのかな。大胆嘉乃本事ハとげされた。一命
を捨ゆゝるゆへ。知ねてゞ此廻向なされ下さるゝと。我
もまを合せまげ俗名にて故生黒桜と廻向しかるぞ
わりまえ。俗話もしやゝ遊苦りまこれかりて神の夜がしかる

ながら秀白ハ体見ニ帰りかゝる。後ニよく志りくる人乃
切りて。秀白ニかゝるを字ニ。嘉乃自身乃分別より仕
ゝる切腹ニあらず。あ人ニ心ハ合せて敵を討べき心底を
きながら。中く敵乃用心きびしく討入ゆき便りなし。
孫更嘉乃武藝ニうとき男なれば。まさかの時ニハあ人が
足まとひニなるん事治定ゝ。ひとりを敵ニをもや当我兄
弟が二歳手ハ大胆。我をねらいあづんで自害しけるよ。ひ
うへハ世上廣くとん我ゆるし。ゆゞんせんわから鬼王圖三郎
ふんごんで討たべし。本事とげてをとげてをとゞくニ捨る
命。此まゞてをめぐらさべしと。嘉乃ニもとめ書を
うせ。あ人左右方かむりやりに話ならさうせけるとか。

兄大胆が武勇のさすきゆへ。大重ねかへたる鬼王國三郎
うくたらいしぜうし。兄も武乃ひとりとや

第三

六十に及んで軍性口上をひねり誓

附り忠孝の絵る切てきてたる神立羽織

此花乃後に花なしと兼を悲する人あり。まこと名花を
さうせめづらしき英。又ハ蘂に令和紅紫をんまに飛り
なすまたはいかにといふに。まへ[illegible]の花を実うへにして
さまぐに咲出しの花にかゝるよし。扨ハ何事もそのたゞ
その筋目の和にもつて出る所あり。人も相もうくの
ごとし。夏に増井秀白が孫永たらハ。父大胆嘉ちがん
庭に生れまさり。祖父に齊らまてきもく七才の時年

を持をめて。師乃手を能うつし。八才まて大文字をひね
里。新虎梅竹の口字を此書れ玄へさげ。小胆へ三十六
人乃前伝の絵る。さりとハ見る人のめををどろうしね。其
和万事筋目にしてまるなりがきをせば。あれ此世悴を
日陰ものになしもたすハ相しき事なかと。祖父秀白これ
を歎ぬ。何とぞお家にせば如人のうちハ御行の学近
ともなり。世の人此以に幸てん事をうまじとおひつゞ
けて。折ふしハ事になぞらへ此事をいへば。永たら中く
出家をさらひ。常にも法師をこれば世乃激民なん
どく。子たの祠にハをこが多しう学かれば。さらば聖学
をさせて大儒になさんとおもへば。兄もこのまず。扨ハ

醫者がよかるべしといふ人のあるにまかせて。さてもとかや
やといへば魚を志かめて吾がりかり。何事をか好むとおもへば。
ひたすら武士の神たらくのみして。那此子は我家来なん
どにして趣びかる。主は因伯母国の城主の姫君。孫舎が
お国へ遣らせ給ふが。金札の文へ系譜あらして此所をとさせ
給ふ所に。此案柄のうちにて兄弟といふ物語なやませなふ。
お附の醫者計者は挟嫌のうかがふ中に。後連の女中
坎のいつ点。いつも兄弟のおこらせ給ふ時は。乙子のもとゆい
まで手紙むすび。並びへば。志ばらくの内にあるをらせ給ひ
て。何のつてがもなき此事之。此まじなひはやく〳〵と申
さるゝ時。いづまか乙子はなきかと。此徒のうちは此條なさ

おくに。大場の中より私乙子と申出る人なし。所
案柄は秀白が家此まへにたちかれば。此家内に乙子は
なきか。まじなひに入事なり。もとゆい所望との給せ秀
白如何ど兄に乙子なりと。所所望にまかせ永吉郎が
もとゆいをさしなげかる。兄は近法かうじけなしと。姫君
の此手紙むすびまじなひかるに。たやはきがんよくならせ
らまし。上下よ給こびの手紙なし。秀白へ所一礼あらして。
乙子はいづまとのおたづまに。永吉郎を出しぬ。板は此まらんべう。
おもくるしからずとは目見へ此ゆるされて。永吉郎は此案柄
のまへに起ざまづきける。主ふぜい板も所にも似千年に
をこへて。そとなしくるびまざるふるまひ。いかさ夏一国一

城乃家老仕宦しやなんどの子たれ見るやうにて。さらに町
人の世悴とハ見へど。姫君も此国にたなされど。永太郎を
ちかくめしよせなひぬ。此郎屋家老村林和記に仰せ付ら
れて。此世悴が親をめし出されやうすを此たづ[illegible]ある秀白
お出光ハ私が孫にて二字紙をかへし者の世悴。父母さを
ようきものにて。此祖父めが育ておきよし。板こそ神おいやし
からざるを此る事ぞかし。村林和記事ハ年々こぶく生
一子をなりしが。六十一の本卦がへりに男子をもうけ
こびたかなるず。寵愛人にもぐれ多不に。去年此名
八何にて失ひ世にものうく。りんや七十に及んで実子の
をべきやうをなし。又お煎如喜子をとなづきごとさりく

ふに叶ず。諸国なくて家乃絶んるもうかしく。気く
さまぐ心薬乃わからなきだ。幸かな去年失ひし世悴
と同年にて。似ることなづきだいよく死んだ世悴がやうて
び実にあるやうになる。何とぞ申請て嚴子に仕りたき
よし。姫君へは邪ひ申上きだ。さあうになるうへはとにかく
もとはめんのうふり。板秀白にむかひ。掛き事お身とのなが
ら先祖にハ。感恥あり。不祥ながら自分へ生らるまじき
か。実父ハ武士にてさへあきだ。手おいくるしからず。さ乃ミ
侍乃家に京男なんどいふハへだ。さりとハ縁といふとの
にや弟が所望になると。志きりに申かけらき。秀白
仕合せ此世悴ふてび武士乃家に立かへる事。掛ち乃

身に致してもと大変を拒ことだにつきゃさず。志かし
此世悴我私乃手よりは自分命へ嚴子にハつかはしがた
武士ハ知行持縁の高下中くそれにかかるものにあらず。
一分乃武臣をたしなきをこそ子孫までもかやかし。血
くさきめにあひしものすへる。身にあらずての手掛ハ強さ
ねとも。先祖乃かまれに肩をもり申が侍のなりひなり。
弟には自分命にハ感恥乃此家とや。そのかまれを此世悴
譲請申事。此に果報子万冥加に叶ひしとなる。閉こ
此世悴ハ捨申だくとなし所をしかどに。只今此海
路へ捨申べし。掛ちすて申たるうへハ此自分命乃
おひろいなさるとてもかまいなしといふ。是ハいかさ命

子細をべき事。いかにもそえのんまかせに致さるべし。
如何どもそらまゝうへも指ひやがしと。和泥がこと
だを守て。秀白は世悴指やたりと家内に入ぬ。和
泥は子が指ひやぬと姫君へ上げる。孫は此世悴は
年ゑ乃ちゞめにすと少いをさし所げ。此宝手をまゞ取
やぬ。程行末は人にすぐれて右衛を清らし。一度の所
用にもたちやべしと。幸は家内のお伽に。はめん乃
うへのせさせられ本国へ百連給ふ。村林和泥。祖父の身
にていかなれだ引まゝ孫にいとまごひをもせざるぞや。
此海原にもてゝりといひすてゝ家内に入終に出ず。此ん
入ふ霧なり。結ゝ乃親見ものと内儀より又きうせなる

に。此世悴が実父は大胆長左衛とて。一こゝびおく
びやう乃名をとりしものなれだ。貴子につかし
てもは此事終にもあらはま。さやう乃不右衛門の
ものゝ世悴は。武士乃子にいこされぞと永右衛進
ゝへされても。二ゝ多び解長左衛が恥を世上にふるく
に似たり程又幼少乃永右衛なぐゝ。如人の後とも
ゝりもてゝ。立身ぬがこゝ事をふびんにもひ貴
子といかずして指子ぶんにして和泥に指ひせなる
ひろへし子なれだ孫の親を知ず。もうざれだ親は
悪にかゝる事なし。是をもひたりして秀白くへたり
らいぬ。孫子を聖もうき親祖父のんにまゝりてかへり

て悪となる事あり又秀白ハ孫にふびんの豊を
もなれて他人になり。二さび武士の家へ取たら
をかへを。孫に上智と下愚のさかい。人ハ学ばざれば
知す。志うされぞくらしと今云実に思合せぬ

四之巻終

東

當流曽我高名松五之巻

同録

一

笠鉢の隣のいぶん東弓ハめいさ的

日瘧を祇ふるい松

本男の祠候請なぞす見

附り

日切祇ぞ祇がなし

富士三里恵な思案な才

二

世界を一飲力足踏込ぐ水乃其中也渦

附り

雅を太とおふて道に世話を焼飯にさき見

慈悲をたゞ無云誤入て手代下信

三

手代に八手代に細石器を擔挺生れ附れ活足

附り

情乃陽塀越に弱り武士れ飛一筋乃強

紋ハ光への刀也焼附なぬ今姓子孫れ栄

第一

笠然乃隣の云分我弓ハめつと的

付り日瘧をふるハ松木男れ祥賀請なかす兄

君ある家来ハ平生人並にして主君まさかれ時に出

慈そのんがけを取ハさ。松を諸木に勢ばといへた。

冬に到り餘乃木ハ葉落をた。己とりきに立さ

やうこ去によつて負臣勤松と熟せり。梅も荒井

茂た主家ハ。曾我又郎時宗ハ抱とあたり熟功に

よつて常盤ヶ谷れ松館ハ拝領して。家ハ居住

仕り事。柳ハ松とやハ。往昔御先祖八幡太郎義家

夜へ奥州武限の舞子の日ハ二葉を持上るそれより

源家の歴々乃豊木にて。今此時に幾十かへりれ源緑

毎春丹項巣ゆけて子代の男を見せまける。古来の事にハ
投地に為れて葉ゆかさ。鍛乃見付を近乃録め世にいかめ
しう覚へぬる隣鍛ハちぶの六郎しげ安の居住之。然るに
此比爲我が孫黨家の小治郎ハ主家が鍛の裏門を切板て
和果なる。其子細ゆ字にしげむみを討ん爲にさぬぐ心を遁し
なれた。不幸にして無念の生害に及ぶ事。奥に一通に認め
殺し置ぬ。いかさま爲古事用心油断なかりしといへども。
豊末乃霊験によつて。郎と所ハ災難をのがれたるかと覚へ
しり。壬年付祈ふ家の小治郎自滅のうへハしげ家心に
かゝる事を有し。拠鬼王ハ冥問と名ゆへ。ちぶが和ざるの
仲間等公を勤め。打をうかゞひ隣屋敷なれば爲古主家ゆ

むくゆん爲の心之。固三郎ハ為し比和撲の場にて爲古ゆ討んと
思ひなれた。其日ハ爲古家ゆざれハせびにおよばど。時ゆうざるを遁し
しが。思へばいつを歓ゆ付のだきん。肘の力ハ鞍根の擅現に
中おろして抜ばへあれば爲古がやうこへ踏込。家来ゆやうぢ
何百人をとても切まくりて。主家に壬付一会の勝負なつ
せんと。思ひこんて来り鬼王に所存をなれば。いやく何かど
武勇われがとて。今大身の志げ家をうゝん事。手ごそなく
てハ叶ひがたしとらぐむれた。固三らハ時家が行気に似て。
一変云出せし事ゆひるがへさね生れ付。例の甚気を出し。
武士乃一念といひ命を的にかゝるうへハ爲古に立せよ
鬼神にもせよ。やハか仕損じゃべきや。毎人心を合せ本屋

とぞんとなるゆへ。何かに見まとわれて事迄引に及ぶなり。
是よりは面々の思案に任せべし。鬼王曰何と云も本屋
さげんなる。其方が緩気では若者は討ぜ仕換じて恥を後代
に残さん男よ。何拠者が討換じて恥かくかは自分獨とぬかし
歌をうたぜして恥かきなふか。朱の論は無益歌を討ての
廣言といへば。鬼王曰中く大屋は悪時に遇しがたき事。
までには主人には兄弟も其余手かるんは祢らひ
よつて首尾能本屋さげなひねかならぜ。若気に幸忍
するなと数訓された。圖云らぬんせぜ今日が其日を切て。
其内に歌悪料若者が首尾れては自分のは目にかゝん。鬼王
曰てわざ笑ふて。日切して歌が討ちりのか。必其方がやうなる

者は大死をするりのえ。それを見るならば鬼王がうまし
かふか。笑止に思ひ数訓するに曰入ぬ無法者は上は手にて
歌を討れぞ。おく大死せんとは自分事祢らふ歌を人に
うたれ世にめんがくなく生がいなく切後するを大死とて
中なき拠者は弱者のごとく日切の内に志げ家を討て見せ
やさんと鬼王をあらうけ扇が答にぬりなる。鬼王は例の
悪気をしりながら。氣立わひしが無分別。気ちがいもひとりは
狂ぬりのをとつぶやきて。ちくぬ乃皺に入にくり。かくて
圖三郎宅癨は炊ひ気力つかれて見えぜ後には
日にく癨にて。発熱又酔をくるしうなるぞりとて
三十日の日を切て歌を討んと繋絢せし鬼王への張合

世るよりハ先内儀にその一分ぐらぐ事ハ農王殿左が隣
屋敷に居る事なれば農王にあげ宗を付せてハ我儀を付て
主君時宗殿へ手向人さわらぐせひに及ぶ農王に無云せし
ごとく我後を切て お果城の太原ロおしや無念やおゐれ一人
つゝじて此病気歓を対とお後させ申へ之とへ定稿乃
命城左三十日の日切れ内ハながらへさせ申さるべし歓をぐ宗
対さらぐいかふも命城ぐ居るべしと鰥の仏神より家嚢
所城時宗の霊魂に祈誓しけるぞ事にやそ日より
寵おちて飲食人にまかせ久る国ぞうまがくなりぬ
是よりして此霊魂城為之来の世に之受縛へ歓を称らふ
君ハ曷我兄弟を守り神とおし信仰して是霊験を得に寄し

ならぐ国三郎ハ次第に気力健にて足踏定り時々こまるを得
加ねる心ぞ勇の至極之あげ宗ハ生得力量をぐれて時宗を
抱とめる程の男当時武威を世にならし日比時のこさまりしゆへ
文原に深く質揚て野なりの毎ぐ為室憲法く海じまるを
まくなく隣家合婆れ出りくとあらぐ疾弓乃笠愈源更の
曲る是年時なるね乱舞高敷ちじ先乃程ハ隣家ゆゑ
年城そぞ立しが後ハ受別て例の斗方なしと其残り
久る城にちく姫の六郎と屋敷ならびけあげ宗雲沼乃
行跡世もりけて人の批判せり

第二

世界を一飲力足踏ぬぐ水乃の中立り酒
付り雖も太と思ふて盗に世話を焼飯ゆくさ呉見

一富士二鷹三蒜子。芝おと姜に見る時ハ。かならず幸ふ事に
こゝがまゝある事。古く人乃中傳へしまぞかし。此法儀なり
慧牛。夜者室家より。摸の皮ハ黄采んとて。蓮食沖ハ
弱る虫ハ。此事ぞと。皮ハ。去ぬる法より。志げ家毎秋同じ
やうなる姜を見る。去によろこゝ心にかけて。座に面天とよく
させ。上手の長ちんじ。法師とめして。函を吉にうらなへ。
こゝくに。聚姜見かさぬる。此人。摸乃皮を寝ゐて。姜ハ
喰さんが爲にとて。もろもろ。芝ハ賞儀る。又病気と上へハ
中上て。一七日が間室家籠居して他出せず。芝ハいかなると
こゝに。伴の鬼木乃松に。時なるぬに去かを。角巣をかけたり。
此爲餘爲に祭り。皮を啄。身ハ喰て餌食とせ。此爲巣ハ

かゝる家のぬし。必身の災難をかゝざる事こめしつゝへて。おそるゝ。
去によろこて。室家相忘して。身ハ情しをけるも。所ゝ。ぞぞに
物忘わきて。ちじめて。室家にあを勤め。其時の日者安達
右る。允方へ。名人の荒中饗食。寝にて隣屋安れち。姫の六郎
志げ安を同居にて。室家右る。允方へ伴ひ。せり。安達元来好
ゆへ。さゝぐの奔走。拝更を比名とぬる。猶市といふ。鷲者
平家とうらなれば。何事も。奥ハ。もよりしく。歌更るとこ乃
大河盛。おのきゞんもすぐれ。なる。角てちゝ姫乃やうこまハ
歌無り。此仲間ごとひの。あり。書ハ冥内にて。楠子木とお鍍の
門とまゐり。裏門分へ出やうこ乃側里と見無る。不に。泉ハ
筧に仕愈る水の間の蓋と。奥わけて。愛想桃灯を持て。出る

ものわり。実門わややと拍手本おやゝぎとりしてうかゞふと八蔵にも
しらぎ。件の男わたりと見無し。嫁ぎ八へ立よる時。ちくぶが方の
飼犬。色紙見付てわやしゝ吠付事けりしく。此刻よつまして
嫁越渡ごしにおまさの犬れなくこゑくせ者懐中ゟ焼飯を
丸出し。犬にわたへてくませ。なれバさすがハ畜生にてやさ飯に
喰付。ぜがめてなく刻とめ。なまじバ。外ゟ犬の二ゑも皆しづまりに
なりぐせものゝ。ぜがめ吠んも事と気毒にや思ひなんぞかし
ませて刀の柄にて犬の眉間をしたゝかにあくきけまじバ。ぞ
所にて犬ハわへなく死にけるを。鯖とかくこせちく吠れやうこゝ乃
ゑ嫁の獅板にかゝりがとぬいてそろり〳〵と切無し。足にてけ
こむ所と。実門ぬきおに切付れバくせものゝ八へたりと引ぐぞ拍手に

実門ゟ根楕隣屋敷の主家ゟ。ゑ嫁より生ざりたる松の沉投に
切付てかつきといふて落たりたりくせものゝ人にもあと逃んと
せるを。実門やらぬとうしろゟ襟筋にて衣かづきかづかれながら
くせ者帯に丸付くんぐりなる。実門も笑への男孫ぢ合くゝ合。
つゐにくせものとトにしてうしろ手に通させ下緒にて志め上れバ
くせ者まつひらに先ちさるべし。元来の盗人なるぞ。此おやしの
前と通りかゝり。宰人ハ身の糧につかまふと出来んにて獅板を
切たるを乃事。耳鼻紙そがれて死た。身に大切なる事のある
者之。命計ハおさまけちさるべしとぞまびになる。此刻を定て
実門何とやら笑を拍ごし。先つらを見んと気なれ夏想拍打
にて見れバ国三郎之ちやくと拍打を吹なし。ぴざとしらぬ弥に

りてあし。気おくらがりまたしれざるが。大小ばかりとて人無量を
人並なる身としてく盗賊に成もつる不可存。定て己がはん事
無二乃倖友をまべしかやうに縛りからげられて。盗人成とて
切れたるといふ事ばかりだ。悔や無念に思ふべし。其上只今
おのれがきをきけば身に大切なる事といふ。其身が盗賊とする
ものかぶれ鍛ハちゝ姫乃六郎重安殿とやて世に情ある大名隣ハ
皮もおよびん慧井殿左重家殿とやて当代力自慢のお方さう
とてハおのれゆるされぞ。主人志げ安殿へ歎宛切と捕しと
やてぬれうびに飾りて上にて刀無りしにするぞ不覚悟
をのめと志かりける。図にしたるを今ハ鬼王といふ事と志り。
金く侍の身に大切なる事ばかりへて命と的にかける盗ハいふ

さねさりとそは不運や私は慧牛若さに恨ある侍にそは自分のやう
なる形悟合なる兄を持しが。此兄が獨ぬけで若さを討事乃
れ淡にのうざるゆへ。素此者と云ぶんいうし。ぜひ三十日が内に
しげ宗が討て首が見せふと。廣言を吐喜ぶまて侍瘧をふるい。
氣力落て心計まで連れ放がらく。其内に日切の三十日は云。
是は侍乃云出しと二言反古に放かとなて心せ記。本後を待子
いまさ謹ぐぬ男なから。一念まで本屋こげんとなし。ごとひ乃
風毎が幸に是へ志のびありしに。座敷をれちがへて此自分の
此主人ちゞ姫夜の鶯嫁の獨板が切やぶりしを見とがめられ
盗賊に所如て相果ん事なんぞうにおしうなる。恐お気にかけ
らまに。拙者は大小をよこえ無れば侍。侍が此自分如きの小者

仲間に繩をかけられ死後との醜辱。われ病わがりまでなくぞ
又人十人は他の救を存ぜぬ。口をしや瘧後まで力量おとり。
やうくとかやうにうしろまに所如しと。涙を膝にまり
付くぞぬぐひなる。鬼王いましめをとき。其方を性根如に
よつて先立て義訓せしに。用ひぞしてかへつて身先にもり
合がかけて立へりしが。武士は一言乃つくしこが勤ぬなり。
日ぶるひれ瘧の心後力ぐあしもなく。大せつな歌を志のび入
討んとはさりとそは卒忽千万。先年曽我の里を出し時
より。重家は其方が主人時宗夜の惡なれば。ぜひ其方に
討まへしとの御来。去ながら若さは空なる大力。殊に大身
まで家来わまさ討そひぬれば。其方一人まではいかゞとおもひ。

いつぐ見がゐるにもゆるされぬ歟。一所にな屋へさぞんと
うこあてうる鉢を拵ましく。半紙もやまつて。是こよひも
すでに仕損じしるまでなきかと。至極の座理といひ
安されば。圓三ら至比私縁意ゆへ。ちぐかりなれ廣云わや
まりやしる。此上はお指掌を背やまじと悔伏乃わらう。
むかふより法大名の推灯おかく見ゆる。是はふしぎといへど。
鬼王あれは今日安達右る允殿へ。各々集まりけるが。
只今座出なるべ。其推灯まてあぞといふ内に置なりふ見ゆる
推灯の紋は丸の内に笄。あれとも歌しげ宗なるんいざ結
まうけ討ちんと。又圓三らもやりなれた。鬼王引とめさまて
あしぞんいて小笠原佐々木澁屋。梶原殿の仕紋を

見ゆる。主人ちぐ梶原の推灯も来れば。中々此場にて其
討ちなど。今しつくく結よとしこそ。圓三らを実内が長屋の
内にぞ志のぞせける

第三

干代は八子代は細石岩と推拖生れ付の泥足
付り情の屋ぞ堀越に飼る武士の魂一箭の鏃
今日の饗應の人々は安達の鍍紙子秋楽を飼ひ一所に立
あひ給へ取くまて座敷がつせの方にていと毎日此見付の
嫁へは秩父六郎重安。慧丹殿をしげ宗あ人計ぞ悔りける。
是も夜方の座敷場に立て。今日は朱にゆるく仕立孫重
の義あいさつしてとぞに立まるく所に。殿を松の木の枝乃
落しうると見付無代あり。こよひにかぎり小屋はふり

されども枝と葉とを雅乃風ハ嫌ふる事ふし　或さよおとおり口伝
見えまへ刃物をそて切ことハ主客を立まて家来の遠ハ何
時ま来りけるぞと召出されて尋らるれ返仇の申る元やより
みハ松元夜半うちやて来りしが是時分ぞ雅此松の枝ハ
いつものごとくさがりて見まつしとや承ス。去て只今ハ何時ぞと
尋るにけりそや八つ時分とや　梅ハ夜半までの溢老酒臭の
うへまでさがりし枝我ごさうに切しおかん。梅花さ有へ
いろぞへ添手わくべやさんとなぜしが此松年くまえびこう。
沉枝か漂より生さがりて。従来の流冲る上の天窓へ
さがりて気毒又毎天の時分ハかつかされひつかかりて。
気角の老雑義もくおかくずと此義をやしてさがりし松の
枝とおくうくやらまじきやうにせんべきとなぜしか幸にある。
お上へもわたりし松の枝をびこう。従来のさる事げに夜半も出
枝我すうしやよりとおろ有るれバ流事といひけるぞ
葉さ様か気まわてて是ハまま主従わる奴かさよぎとある手を
出して携負もる事ハさそもくるへず。秘蔵の松の枝と切て後と
ある法真ハ君おうしたれバなて此松の枝を切られバ家来か我おれ
嫌しさを同おが上より私欲也妻の木といひかくて切合を
吟味いるさへでハ死おつぞとおしおつれ主安へおくれりける故。
主安を思案乃わりつ。申る元梅子木が是よみ手とそ見付
出しね。葉さされて是ハ分が屋敷の梅子木かと家来ハ悔嘆
されバお屋敷の梅子木にわづぞといふ葉さ安御ハ御しさる乃

なくびなれば。ちゝ姫殿方の柏子本之。然れば切人は重安殿屋敷に居ゆべしとおとしつけたる云ぶんお名ゆんにん姫がこれ那は見ゆるあへ中間実門取出恐ながらは松の枝は私の切落しましてござる。殿方は何おのれが切落しけるとや。白状のうへは重安殿を老と身が方へつかはさるべし。重安は其れは何も後ぐらしぜひお請知なさるゝ所存かは念にも及ゆさぬ。後ぐ孫が系が身命にかへて請知ゆゑ。重安は其れは此方も同おとぜでは いろめがぬつ時。実門主人志げ安まむかい。そまく私と殿方へつかはさるべし。恐ながらかくご仕りて殿方へ乗りぜいぶんお俺云仕返しゆへしと云。重安実門がつら服と見ていかさる汝は殿方へ俺云と仕返せべし。思量見とゞけ乗り。極此

一こしは其方が殿金に重るぞとなげ出せば。実門世にあるがふ存乗りぬ。志りし拙老めがぬぞさまましうさび身を。かし見へのある地にそれ御刀紙拝領に及ゆさずと云へば。其方ごとの御れ地。いかにしても心えなし。一論んせん此方へ渡せ。実門は其お情の此主人さるなれ。其此場とゆ拙老めは一こしにそ此へぞ。憲邪ながらそれより此論んはさるべしと。一こしとなけば重安つくぐと見ておどろ紀。おつそれ姫かゝわぢそれにそは姫程殿方へまび事と仕かゝまじ。見殿方は松の枝と切ゆる家来実門を。お渡しゆ此請知なさるべし。身方は屋敷へ入ゆ。こまや実門殿方へお俺云ゆて後邪へ乗らぜと身が屋敷へ乗れ。両主従なるぞと対に心をふくえて。重安は

家男のゆくさへ入ゆふ。所へ園三ちとんで出。是最も主君のくれ
ゆるさねとつめかくる。夜もきろと見。おのれ何者にて家を主の
歌といふ。おくそ方に所中にて抱とめられたる。爲家のあら
時宗が家来園三郎。是成冥内といふは兄鬼王之。根々年月の
苦労得ようきぞ。今月今日かくまぢかふようて揚頂ぬぶ。
うくご仕れといへば。夜も皮下ことて事の理を正れまへねぬ
だらかなおのれらが主れ時宗は。御所においてらうぜれにおよぶ。
家居合てくるとめくるか碎事か。家なうぜ大家君を家
大名はいづまにても時宗代くるとめん。是は忠義歌といふは
わらぜうろうものめといへば。女人得をそろへ。御所において
時宗のらうぜれを解しくるはむなるが。其方は女に渡めをうへ。

時宗後ぶ毎してうしろか抱とめ。大ぜい出合と人よぶかりハ
志なるぞ。時宗ハ誠の女と思ひ。女ハ武士乃手にかけざる
法。ゆるして奥へ毎りけるよ。なんぞや名のりかけぞ。
じごまりしらるを手がらに。武勇ぞそハ何事ぞ。主人時宗
縄め乃舳ハ其方ゆへ。さてそ無念に思ふ。其方を討主人の
志に毎むくるぞ。發たる空よりしく。お手に成首ゑて全んと。
手やりにそ付かくるを。鬼王うけながして圖三ら(海)贄編
の毎り先を方一人として仕れ。案ハ寝とふせぐとて。發たが
家来と切まくり門内へ追込。戸ぎしの口に刀後ろ向へて
一人も出さぜ。圖三らハ發たと切むすび。思ひこんで命後
おしまのぞ。ふんごとく前なる海へ發たと切こと。家男も

ついてこんでおり。源まぶれになつて毎人切合。つゐに發たと
切ふせ。主君の歌年来の恨思ひしれと首打おとし。海の
中よりかけわがり。去とてハうましやと。四方八方を拝し
武運にかなひ。其がゝやと。悦びくるもむこ。鬼王も圖三らに
ゑ付。でかしらりく。なるとげて。悔しいも所と。親と親と
まり合。悦び涙かぎりなし。いざひうへハさしちがへて。来来れ
主君に生ません。去ながら志げやを夜ハ当分なからも
此主人。拝に究なお情ある。一ら後ちさるべきとれ此詞。
お礼といひ又我々が身のうへと。志らせ中為にとて圖三郎
ゆびくい切て。其血にて委細を出しこゝめ。我々お暴る後
大事の主君乃歌の首。志げ安夜へ郎け中さんと。發たが首の

こゝれ娘なほ出家をむまひ付。嫁ごにちゝ娘の館へなげ入
ちり。西へ志げ安な田を石つれ出ぬひ。梅々疾より夜なれ。
石つかひやうもあべきよ。これおそ方が見せしる一ちし乃
ちゞ夜よいおりにもつかうれ也へ彼わり。是は爲我なるぞ
付ざる紋。此一ちし彼毎ぞさむ也。まさしく爲家兄弟が
家来。若さは恨をちらさん爲。隣屋敷の家に後りなかと
作りしよ。我此場にあて若さを討せくは後日は世上乃
評判いかゞと。まざと屋敷へ入て若さを討せちなかこげ
ちるうへは切腹は及ぶべからず。家石つれ猶会夜へ系上して。
上さをうかひやべし。固こゝら討かれてうしゆへ泥付て見ゞ。
洗てはおへ系るべし。長つて鬼王そぞ成井の水くゝ上。固こゝらが

男に付し泥をわらい落しける。固こゝら鬼王が顔を見てはは自分
小を顔に泥付ちり洗ひ事へといへば。鬼王皮さいぜんを方が顔へ。
男が良をわてしゆへ付ちるえいかゞ来来之の形見の泥おと
さゞと涙ぐむと。重安いさめていまぞ猶会夜れは下知くちぞ。
五年若さ武威にはちり。邪欲奸曲は前のは耳にも立れは爲れは
給付ちまんもちかりぞ。先は主の敵を志びよく討て天下に名を上る
事。是程武士乃面目世にわらぞ。笑ふてはおへ系れとて志げ安
同乃なされる。誠に忠貞義礼は叶ひ。ぞいさかしと来の代乃。
境にうつる子代の親。今よろ川代乃ちゞ免ぜかし

又ノ巻終